

環境教育のすゝめ

コカ・コーラ環境教育賞 事例集



Created by Coca-Cola Students Environmental Summit



〒106-0032 東京都港区六本木6-2-31

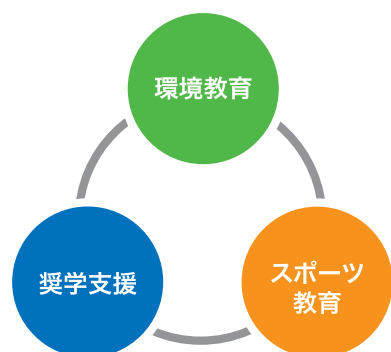
<http://www.cocacola-zaidan.jp/>

はじめに

公益財団法人コカ・コーラ教育・環境財団ご紹介

公益財団法人 コカ・コーラ教育・環境財団 事業概要

2011年9月に公益財団法人へ移行したコカ・コーラ教育・環境財団は、2007年6月、37年継続していた日本コカ・コーラボトラーズ育英会と14年継続していたコカ・コーラ環境教育財団の事業を継承し、一元的に運営、推進できる母体として設立されました。心豊かでたくましい人づくり (Healthy Active Life) を理念とし、環境教育、奨学支援、スポーツ教育を柱とした貢献事業を企画、提供することにより、国際社会が求める青少年の育成と、彼らを取り巻く地域社会を支える人材の育成を通じ、豊かな国際社会の形成及び国際親善に寄与することを目的に多様な事業を展開しています。



その中で、環境教育事業においては、環境教育を通じて地域社会、さらには国際社会において活発なリーダーになる人材育成を目的とした事業を実施しており、「コカ・コーラ環境教育賞」、「コカ・コーラ学生環境サミット」などの取り組みを行っています。

コカ・コーラ環境教育賞
コカ・コーラ環境教育賞は、環境ボランティア活動の助成・支援を通して、環境教育・環境保全活動を促進することを目的に、1994年に創設されました。以来、18年にわたり、環境教育に関する活動が顕著である団体・個人を顕彰しています。

コカ・コーラ 学生環境サミット

公益財団法人コカ・コーラ財団が、地域社会や国際社会における次世代リーダーの育成を目的に、環境教育事業の一環として、2010年より主催する大学生向けの環境教育プログラムです。プログラムでは、大学生が環境マインドや企画力、チームをマネジメントする力を養うための支援を行っています。

「環境教育のすゝめ コカ・コーラ 環境教育賞事例集」 制作について

公益財団法人コカ・コーラ教育・環境財団では、昨年度に引き続き、「コカ・コーラ学生環境サミット」の活動を企画。今年度は、5大学から12名の大学生が参加し、「コカ・コーラ環境教育賞」(過去18年間で1600団体以上が参加)から優れた事例を紹介し、学校現場において環境教育を実施することとに役立てていただくため、「環境教育のすゝめコカ・コーラ環境教育賞事例集」を制作することとなりました。事例集制作にあたっては、公益財団法人コカ・コーラ教育・環境財団より、チームビルディングやリーダーシップについての講義、学生同士のディスカッション機会の提供など、活動のサポートを行っています。

はじめに

本事例集を手にとっていただき、ありがとうございます。

本事例集は、歴代のコカ・コーラ環境教育賞の受賞団体の活動を紹介することで、環境教育に少しでも興味がある全ての皆様に、何かしらの価値を提供できることを願って制作いたしました。特に、これから環境教育活動に取り組もう、または既に取り組んでいる環境教育活動をより大きくしようと考えている先生方が、数ある活動事例の中から共感する活動に出会い、自分で実行していくキッカケになることがあれば、我々編集者にとってこの上ない喜びです。

コカ・コーラ学生環境サミット一同

CONTENTS

活動事例紹介

特別インタビュー

- 3 沖縄県 浦添市立港川小学校
- 9 青森県 南部町立名久井小学校
- 15 岐阜県 青森県立名久井農業高等学校
- 20 香川県 加茂郡東白川村立東白川中学校
- 25 香川県 三豊市立下高瀬小学校

活動事例紹介

活動団体の歩み

- 25 沖縄県 浦添市立港川小学校
- 29 青森県 南部町立名久井小学校
- 33 岐阜県 加茂郡東白川村立東白川中学校
- 37 香川県 三豊市立下高瀬小学校
- 41 北海道 NPO法人ビオトープ・イタンキン室蘭
- 45 愛知県 刈谷市立小垣江小学校
- 49 京都府 京都市立峰ヶ岡中学校
- 53 秋田県 潟上市立大久保小学校

活動事例紹介

地域別 歴代受賞団体紹介

- 57 栃木県 葉鹿エコクラブ
- 61 埼玉県 さいたま市立日進小学校
- 65 滋賀県 東近江市立能登川南小学校
- 69 沖縄県 久米島ホテルの会
- 73 鳥取県 彦名地区チビツ子環境パトロール隊

- 79 北海道・東北
- 82 関東
- 87 中部
- 90 近畿・中国・四国
- 94 九州・沖縄
- 97 公益財団法人コカ・コーラ教育・環境財団 小澤紀美子理事からのメッセージ
- 99 コカ・コーラ環境教育賞概要
- 100 寄稿
- 101 編集後記

Interview
01第18回 コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」大賞
浦添市立港川小学校

港川小学校の池原鉄（いけはら てつ）先生（写真左）。前任の先生から受け継ぎ、現在、港川小学校の環境教育を担当する先生で、今回様々な形で協力いただいた。

校の環境教育が始まったきっかけ、または活動が本格的になったターニングポイントなどがあれば教えてください。

池原先生（以下、池）…私は前任の先生から引き継いだので、それらに関しては、銘苅さんや鹿谷先生にお聞きください。

鹿谷先生（以下、鹿）…私も、まあ、一番最初にこういう話に関わったきっかけは銘苅さんに依頼されたことから

なんです。後からお話されると思いますが、銘苅さんが大きなビジョンを持っていらして、その中で、海の専門家として自分がサポートできる部分でサポートしていくということになったわけです。

銘苅自治会長（以下、銘）…地域側からしたら地域なりに、課題や問題意識を持っているんですね。港川では、人口も増え、高齢者が増えていく中で様々な課題が出てくる。その例として、高齢者の役割・生涯学習の必要性、世代間のわだかまりの解消、地域の結合の必要性などがあるわけです。そういった中で、「地域の宝」であるカーミージーを通して何か活動が出来ないか、というように考えたわけで



地域自治会長の銘苅全部（めかる ぜんろう）さん。銘苅さんのビジョンから港川小学校の環境教育活動が生まれた。

第18回コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」大賞を受賞した浦添市立港川小学校は、沖縄県の南部に位置する小学校である。「沖縄」といえば、綺麗な海を初めとした大自然というイメージが湧くが、近年埋め立て等の開発が進み、驚くほどに「沖縄の美しい海」を堪能できる場所は減って

いる。そういった状況下で、地域自治会の銘苅自治会長や、海の専門家である鹿谷先生の協力の下、この小学校では4年生を対象に、7年前からカーミージー（亀の岩の意）における環境教育活動が始まった。カーミージーは、この地域のシンボルの存在であり、その周りには沖縄の海が凝縮された

ビジョン、想いを持った地域の
キーパーソンがつながる。

これが環境教育を進める
ポイントなんじゃないか

―本日はよろしくお願います。この事例集は主に、これから環境教育を始めた、または、始めたばかりの先生方に読んでいただきたいものなので、港川小学

社会はつながりあってるんだ。

人間はつながりあって生きてるんだ。

そして、自分の頭で判断し、

考えることが大切なんだ。

―この二つが、僕が環境教育を通して

子どもたちに何とかが感じて

欲しいことなんです

―それでは、池原先生の環境教育に対する想いはどういったものですか。

池…「環境教育」って何かと言われたときにですね、考える時期もよくあるんですよ。要するに、環境教育を通してどの様なこどもを育てたいかってことをですね。僕は、カーミージーを通して、こどもたちに「生き物はそこでき生きられない。そしてお互いにつながりあってる。」ことをまずは感じて欲しい。そして、地域の方がいて、我々教員

がいて、こどもたちがいて、活動が行なわれる。そこで「あ、人間も皆結構つながって生きているんだな。」っていうところを、なんかこどもたちにつかんで欲しいですね。

―なるほど。

池：もしかしたら4年生では難しいかもしれない。でも、彼らが徐々に成長するにつれて「人間は社会とつながりあって生きていかなければいけない」っていうところをいずれつかんでいくと、と。

―そういった明確な答えを提示されない、しかし人生にとって重要なモノを漠然と得られる場が環境教育ですよな。

池：そうですね。そういった事を学校の教科書で教え

られるのかな？って考えた時に、やっぱり、外に出て、地域の方と触れ合って、生き物と触れ合って、自分自身の体験っていうんですかね、それをこう、うまく組み込んでいかないと、こどもたちは思考できないだろうし、自分で判断できないだろうと思っただんです。で、それが出来るようになるかどうか、こどもたちの人生に関わることだと思うんです。



海の専門家である鹿谷法一（しかたに のりかず）先生。銘刘老师の依頼を受け、カーミージーでの活動を当初からご協力されている。

―今のこどもは、自分の頭で考える事が少なくなっているとも聞きます。

池：やっぱり社会に出て、自分の頭で判断していかなきゃならなくなること考えると、やれ、自然が大切だね、開発とかも良くないよね、ではなくって、この状況を実際にこどもたちが感じて、じゃあどうするのって考えて欲しい。今は答えが出ないかもしれないけど、いずれは自分たちで答えを出さないとけない。

―それでは、「カーミージーを守ろう」っていう意見だけではなく、「生活を豊かにする開発が進んで欲しい」っていう意見をこどもが持つこともアリ、ってことですよな。

池：まさにその通りです。実際にそういう意見をもっ

たこどもいました。

―他にも、そういった「こどもが自分の頭で考える」ことを実践したエピソードがあれば教えてください。

池：一番象徴的だったのは、生き物救出作戦の時（注：カーミージーの埋め立て工事に際し、貴重な生物を保護しようと、生物の移植を試みた活動）に、開発する立場の市役所の方から話を聞いて、鹿谷先生からも話を聞いたんですね。それで、まあ生き物の移植するのは難しいと、このカーミージーの移植をされる生き物たちも、もしかしたら死んでしまうかもしれない。と。で、成功するかどうかはわからないよって。でもあたたたこうする。って。それで、こどもたちが自分た

なければならぬ。

そして、こどもたちが、カーミージーを守るべきものと判断した時に、行政にも少しずつ変化が生まれているんです。

ちで決めたんですね。それこそが一番大切なことなのかなって。

成功するか分からない。それでも救いたいからやろう、こどもたちが決める。我々先生が、こういう状況だからやろう、と決めてしまうのではなく、こどもたちが決めて、生き物を救って、でも、もやもやする、良いことをした気分にはならない。

つまり、多方面からの意見を聞き、こどもたちが自分の頭で判断する、そして結果がどうであるにせよ受け入れなくてはならない。という、最も象徴的なエピソードだと思います。

環境教育に対する関わり方、モチベーションは人それぞれ

―これだけ長い間、環境教育に携わっていられるモチベーションの源はどこにあるのでしょうか。

鹿：モチベーションというほどのものは私には無いんです。地域を巻き込むことを理解し、話を聞いてくれる。答えを聞くだけじゃなくて、自分自身のビジョンを持っている人たちがいる。だから、お手伝いしているにすぎないんです。

まあ、強いて言えば、人に教えることが好きだ、ということはあります。

銘：行政にも少しずつ変化が生まれてきたんです。カーミージーを守るにしても、ただ環境を守れ、だけではダメ。それは、開発を進めることで生活が成り立つ人もいるわけで、米軍基地の

まず地域に出かけ、話を聞く。

「あつ、すごい。この感動をこどもたちに伝えたい。」
―これが環境教育を始めるスタートだったんです

―それでは最後に、これから環境教育を始めようという先生方に何かメッセージがありましたらお願いいたします。

池：何をやったら良いのか分からないという先生は多いはずなんです。私の場合はですね、すでに地域の取り組みがあり、現場に連れていってもらったときの感

動がスタートだった。僕らがまず生き物に触って、「あつ、すごい。この感動をこどもたちに伝えたい。」ってね。

中にはそういう環境が無いからできないよって言う人もいるかもしれない。でも、そうではなくて、やはり我々教員もアンテナを広げて、地域にこう、出か

COLUMN

～開発に直面する沖縄の海～

沖縄の海は、どこも同じような形で開発が進んでいる。

それらの開発は、主に経済発展や利便性を追求して行われる道路建設や埋め立て等によるものだ。そこには、開発により経済発展を進めたい向きと、自然環境保護を優先する向きとの、双方の志向性が見て取れる。

ここでは、こういった沖縄における二つの方向性を課題とする海の中で、実際に私たちが足を運んだカーミージー、辺野古（へのこ）、泡瀬干潟（あわせひがた）、佐敷干潟（さしきひがた）を紹介する。

カーミージー

カーミージーは港川小学校から程近い、空寿崎（くうじゅさき）の先端に突き出た珊瑚礁の岩のことを言う。銘苅さんの言葉をお借りすると、埋め立て等により沖縄の海が様変わりしていく中で、カーミージーは「変わらないでいてくれたもののシンボル」である。しかしながら、沖縄のほとんどの地域と同様、カーミージーもまた、開発に直面している。それは、交通渋滞を緩和するための港湾道路の建設に伴うものである。ただし、小学校や自治体の働きかけにより、カーミージー周辺は埋め立てによる道路建設ではなく、橋の建設に変更されるなどのケースもあった。



泡瀬干潟（あわせひがた）

泡瀬干潟は、沖縄の中部、東側に位置している。私たちが訪れた時は、干潮の時間帯であり、多くの貝類や小魚などの生物を観察することができた。



辺野古（へのこ）

辺野古は、名護市東部に位置する区である。私たちが訪れたのは夕暮れ時であったのだが、辺野古の各所に広がる白い砂浜と、独特の岩場が織りなす風景は、とても幻想的で美しいものであった。



佐敷干潟（さしきひがた）

佐敷干潟は、沖縄の南部に位置する干潟である。ここは、他の干潟と同様、埋め立てによる開発もさることながら、干潟に捨てられたゴミなども目に付いた。しかしながら、貝類などの生物も多く観察できた。

けていたり、地域の方からお話を聞いたりですね。まず行動することで、新しい扉が開かれたりするものなんです。

やはり子どもたちは学校を出て、社会に出るのですから、そこを我々がみえていないと子どもたちの成長を学校だけで止めてしまいかねない。そうしないためには、我々が率先して行動をしていく必要があると思います。

そして私自身は、地域との連携、教員同士での伝達によって輪を広げ、新たな活動が始まっていけばうれしいと思います、外部への情報発信なども意識をするようになってきています。



約2時間半にも及ぶインタビューにもかかわらず、終始話が途切れることが無かった。そこには、池原先生、銘苅自治会長、鹿谷先生、それぞれの想いがあるのを感じた。彼らはそれぞれ、学校・地域自治会・専門家というように立場を異にしており、3名の想いは完全に重なり合うものでは到底無い。しかしながら、部分的に重なる部分というものがあり、それがこの環境教育活動を成り立たせているのだと強く感じた。こういった、違う立場でありながらも、それぞれのビジョン、実行力を持った人間がつながること、これが環境教育において重要な一つのポイントだと思う。

Interview
02第18回 コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」優秀賞
南部町立名久井小学校

名久井小学校は青森県三戸郡南部町にある。ここは名久井岳を中心とする豊かな自然に恵まれ、秋になると様々な果物や野菜が取れる。りんごは全国でもトップ10の出荷量を誇り、サクランボ・梨・ぶどうは県内1位の生産量を誇るそうだ。町の中部を流れる川には産卵の時期を迎えた鮭が川を上っていた。

名久井小は、生活科や総合的な学習の時間を通して、ふるさとを愛し自分たちの住む地域や自然に誇りを持つ心を育てる「ふるさと学習」や、身の回りの自然や環境を取り巻く問題点を見つけ解決方法を探り未来を創造する「環境学習」を行うことで、未知へ挑戦し、自分へ挑戦し、未来へ挑戦す

るこどもたちを育てる学習活動に取り組んでいる。また、全校をあげての取り組みや学習の成果の発信も積極的にを行っている。

名久井小学校が 目指した3つの柱 系統性、実践力、 情報発信

「今日はよろしく願います。ではまず名久井小での環境学習について概要をお伺いしたいのですが。」

久保先生以下、久：はい、名久井小では3つの柱を軸に環境学習を行うことを目指しています。

まずは系統性です。名久井小学校では主に総合的な学習の時間に環境に関する授業を行っています。しかし総合的な学習の時間だけで



今回、お話を伺った理科教諭、久保 慶喜(くぼ よしのぶ)先生。
名久井小での環境学習を中心的に行っている。

はどうしても単発的に終わってしまい、やらなければやらないで終わってしまう場合があります。ですのうち場合があります。ですの、理科や生活科の中にもエネルギーや環境の側面を持った授業をやっているということになっています。様々な授業に環境の側面を組み込むことで生活に、身近に環境の意識を織り交ぜていこうというねらいがあります。

次に実践力です。言葉だけ



の授業では分かったようであまり分らないままになってしまっている場合があります。ですので、なるべく実験器具を取り入れてこどもたちが自ら体を動かして学んでいけるように工夫しています。

環境問題を考える時には、環境を綺麗にしましょう、守りましょうということに気をとられがちだと思います。しかしこれは具体的に言うとエネルギー学習をするべきということの裏返しです。理科の授業では、特に石油がなくなる問題や温暖化問題についてとりあげたりしてエネルギーというものに対する理解を深めようとしています。それは決して難しいことではなくて、磁力から電気エネルギーが生まれることを、小学生で



久保先生のリクエストで、大学生活についてこどもたちとお話する場面がありました。

ます。

そして3つめは情報発信です。こども環境サミットで他地域のこどもたちの前で発表をしたり、交流ができる場所を設けています。

特に今は鮭の放流についての発表の準備を進めています。川の中で鮭に注目するだけでも自然界の厳しさがわかります。秋に鮭は上流に上ってきます。秋に産卵するのですが、その産卵した卵を狙って鳥がやってくるのです。

**自分たちだけではどうしようもない
家庭・地域に訴えかけ巻き込んでいこう
エネルギー環境フォーラムの実施**

その様子をこどもたちは目の当たりにしてよく川を見に行くようになりました。鮭の放流活動を通して自然に親しみが持てたようです。それから最近の大きな台風で近年まれにみる洪水が起きました。3メートルもあるリンゴの木もすべて水に浸かってしまいダメになりました。この地域の米・リンゴは全滅です。それだけではなく、川が氾濫して水が引いたあとには、上流からたくさんのゴミが流れてきました。川の汚染問題が浮き彫りになり、ゴミだらけになった川を見てゴミ拾い活動しようとかもたちが自発的に動いてくれました。

また情報発信力をさらに強めていこうということで地域の方々を呼んで、エネルギー環境フォーラムというものを定期的に行っています。小学6年生が環境問題を学んでいくうちにCO₂削減という問題にぶつかった時、自分たちだけではどうしようもないという結論になりました。家庭・地域を巻き込んで、更に言えば国単位で、世界単位で取り組んでいかなければいけない問題だと。だからまずは身近な地域の人たちに訴えなければいけないということでは

フォーラム開催に至りました。
―活動をしていてこどもたちの成長を感じるときはどんな時ですか。
久…こどもたちが地域へ情報発信するときに学んできたことを自分たちで劇化して紹介したのですが、積極的に活動する姿をみて、成長を感じましたね。
またかつての教え子が名久井農業高校のチームとしてコカ・コーラ環境教育賞次世代支援部門の大賞を受賞したときは、かなり感慨深いものがありましたね。

**環境教育とは生き方教育
どんなに大切だと訴えても、
こどもたちが本当に
そう思わなければ
変わらない**

―久保先生にとって環境教育とはどのようなものと、捉えていますか。

久…人間教育、生き方教育だと思います。私がどんな



に大切だと訴えても、こどもたちが本当にそう思わなければ変わらないです。こどもたちの考えが変わる＝生き方が変わることだと思っています。自分でも実践できないこともある。だけれど出来ないで終わるのではなく、だからこうすべきだということもこどもたち

に伝えていかなければいけないと思っています。

―これから環境教育をする人へ向けてメッセージをお願いします。

久…環境学習というと我々も素人の部分がたくさんあります。しかし、そこで「自分が分からないからやらない」のではなく、「自分もこどもたちと一緒に楽しく学んでいく」というスタンスで良いのではないのでしょうか。わからなければ外部から専門家を呼べば良いし、気負う必要は全くないと思います。少し探せば協力してくれる地域の人たちやネットワークは見つかります。

もうひとつ大事なのは、なんとと言っても「分かりやす

さ」だと思います。言葉だけじゃなく実践でモノや仕組みを見せてあげる。簡単なものを使っていかに理解させるか、いかに感じさせるかを意識して、体感させてあげる。まだまだやられていない環境学習はたくさんあると思いますし、基本的に楽しんでやればいいと思います。

―今後の展望を教えてください。

久…環境学習は一生懸命やる人はやるけど、そうじゃない人もいます。先生によって様々。異動があっても続けていくためにこの学校では続けていけるように努力していきたいですね。



第18回コカ・コーラ環境教育賞「次世代支援部門」大賞 青森県立名久井農業高等学校チーム・フローラフォトニクス



チーム・フローラフォトニクスを引っ張る、木村 亨(きむら とおる)先生

ここからは特別にある高校での活動を紹介したいと思う。名久井農業高校、チーム・フローラフォトニクス。第18回コカ・コーラ環境教育賞において「次世代支援部門」で大賞を受賞した団体である。名久井農業高校はページで紹介した名久井小学校のすぐ近くに位置している。

是非、名久井農業高校の取り組みを多くの人に知ってもらいたいと思いい、特別に取材を行わせてもらうことになった。

震災をきっかけに 活動が大きく変化 「今しかない」

チーム・フローラフォトニクスは「草花と光の関係を応用した新しい園芸技術の開発」を目指す植物研究会として2009年に設立。現在は幅広い分野で活用できる新技術を考案しよう活動している。

顧問の木村先生はこう思い、生徒達に話を持ちかけたそう。



「昔から見ていた花も塩害で赤茶けていて救いたないなと思いました」

なかつた。まず活動を行う為に県に保護の申請を出した。



を咲かせた。そこで人工授粉を行い、6月にはその種を採取。その種を鉢に植え、いつもの研究場所である温室で育てた。

温度管理をし、水や肥料を与え芽が出るように丁寧に世話をした。

幼稚園や被災地で 花壇の再生活動

津波の被害を受けた八戸市内では塩害被害が出ていた。そこでチームで注目したのはマイクロバブルという技術であった。

「マイクロバブルの技術は水耕栽培の研究の目的で使おうとしていたもの。水に細かい泡を含め酸素の多い水を与えると根が早く伸びるという技術です。今回の件を受けて、除塩に使えないかと生徒たちと考えました。そして実際に結果を出すことが出来たのです。」

マイクロバブルを含んだ水を土に通すと通気性が良くなり、土に含まれた塩が早く流れていくように



なるそう。

「これは行ける。」

マイクロバブルの装置をもって地元幼稚園を訪ねた。津波に一瞬で花壇が飲まれてしまい、塩害で春には出るはずの芽が出なくなっていた。チームの2年生で花壇の除塩活動が行われた。その後、園児達と一緒に新しく花を植えた。

の高校生と除塩作業を実施し、花壇も一緒に植えた。

サクラソウの 花言葉は「希望」

コカ・コーラ環境教育賞で大賞を受賞したあとも、チーム代表の市沢



理奈さんらは精力的に活動を続けている。

市沢さん「これがゴールではなくスタートだと思います。これからも活動を続けていきたいです。」

果物が 熟していくように ゆっくりと

「これから環境教育に取り組みたい人へ一言頂きました。」

木村先生「環境の学習は近年、盛んなのでしょ。課題研究の機会が増えていますが、『環境』は敷居が高いと思われがちです。しかしその中で、何とかしなければという思いが大切です。興味がある、必要だと思う、というちょっとした思いがあればいい。すぐに結果を出すものでもないと思います。地域を巻き込みながら、果物が熟していくようにじっくりゆっくりとやっていけばいいのではないですか。」

Interview
03第17回 コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」優秀賞
加茂郡東白川村立東白川中学校

「つながり」を感じる

岐阜県の山に囲まれた自然豊かな地域にある加茂郡東白川村立東白川中学校。山と共に生きてきたこの地域では学校と地域が一体となっており、植林活動などを行い、人同士のつながり・過去から未来への時間的なつながりを感じさせる教育を行っている。その活動について、今年度から東白川中学校に

赴任し、1年生の総合的な学習の時間を担当されている井上誠先生にお話を伺った。

村に定着している
プログラム

「今日はお忙しいところ、ありがとうございます。まずは先生のプロフィールから教えていただけますでしょうか。私は保健体育を担当しています。今年で教師になって



教員歴14年、保健体育を担当されている、井上 誠（いのうえ まこと）先生。一見するとラガーマンですが、実は剣道部の顧問をされているそうです。服装は先生のご趣味だとか。

14年目になります。教員人生の3分の1が過ぎてしまいました。

「植林活動の歴史について、簡単に教えていただけますでしょうか。」

植林自体は緑化少年団の結成以来、長い間行われているようです。植林を授業に取り入れたのはここ10年くらいなのでしょう。村の産



東白川中学校全景。木の床がきれいな校舎です。

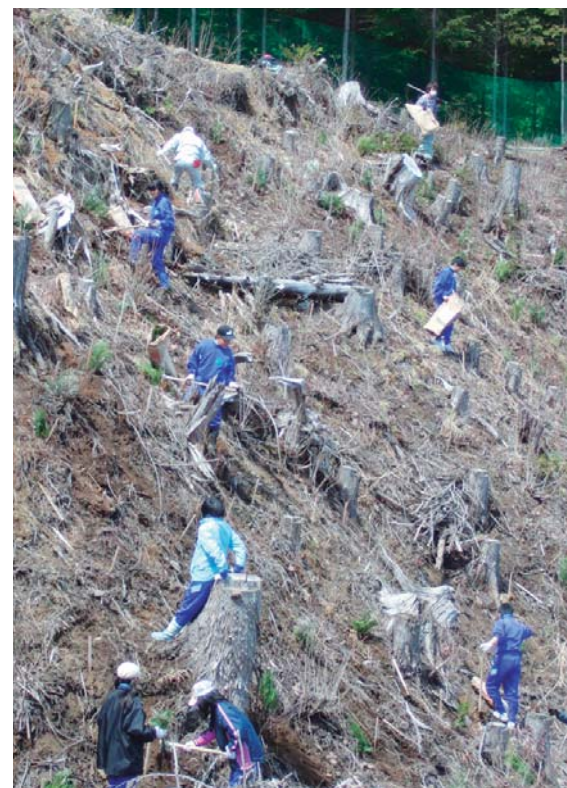
業が林業なので林業に携わる人が多く、山と生活は切っても切れない関係なのです。

総合的な学習の時間が始まってからずっと学習内容に組み込まれていると思います。ゆくゆくは地域貢献ができる人材を育成する狙いで学習をしていて、1年生は地場産業を知る体験を、2年生は村の中での職場体験、3年生は修学旅行を兼ねて東京（ディズニリーゾーンなど）で職業体験をしています。最終的に郷土愛を育んでいく狙いで、植林はその一環です。

以前は岐阜市の学校に勤務しており、長良川の水質を調査するバックテストなどをすることはありましたが、こちらに来てからはより環境を身近に感じるよう

になりました。環境が生活に密着しており、大切なものだと思います。

木を植えてもそれを使えるようになるまで、少なくとも30年、40年かかります。ではそれを誰のために植えるのか。生徒たちは「自分たちの子ども、孫の世代のためである」と自発的にふりかえりに書いています。自然環境にいいから、という短絡的な思考はありません。



生徒たちの先祖が代々、時間を掛けて大切にしていた山を受け継いで、バトンを後世にもつないでいくつながり。活動を通して、「地域の未来に対する想い」が定着しつつあると思います。村全体に学習プログラムが定着しているな、と赴任してきて感じました。

植林活動では苗木を1000本くらい植えます。生徒たちは急な斜面でもど

つながりを感じ取ってもらう、
生徒に視点を投げかける

「つながり」が1年生のキーワードだと思っています。年明けの学習発表会のテーマはおそらくつながりになると考えています。上流と下流のつながり、過去・現在・未来のつながりといったことを意識していければいいのかなと。

―生徒たちがつながりを感じたと思う瞬間はありましたか？

最近間伐をやりました。直径20センチの木を敢えてのこぎりで伐ります。一人5本やるのですが、すごく大変です。伐った木の年輪を数えると35年で、生徒たちは「先生と一緒にの年輪でこれにしかないのか！」と驚いていました。35年という時間の重み、掛けられた



手間を感じていましたね。

ここで生徒たちに視点を投げかけないといけません。調べておしまい、ではない。その背景にある人の営み、努力、工夫にいかにも目を向けるかが学習の質を左右すると思います。自分はこの活動をする際に「つながり」という意識があったので、年輪を数えさせました。また「チェーンソーがないころはどうしていたんだろうね」と問いかけて昔に思いを馳せさせたりしています。せっかく活動しても学びが無いと、環境教育とも、学習とも言えないですよ。

―これから気をつけていくこと、課題はありますか？
今やっている活動自体は素晴らしいですが、来年度（平成24年度）から総合的な

学習の時間削減が完全実施されるので、どのように質を維持しながら学習していくのかが悩ましいです。山に関する地域の人材が豊かです。ので、時数の他には心配はしていません。

岐阜県には例えば緑の少年団のように地域主体となって土日活動する団体もあるので、これから授業以外の形態をとるかもしれません。

地域と二体となった活動
―活動に際して、本などを参考にされましたか？

植林活動を行うに当たって、本などを参考にすることはありませんでした。村の役場に長年勤められ、今は嘱託の職員をされている栗本さんという方から教わりながら活動しています。

その方が職場の後輩にも山を大切にすることを伝えておられるようです。生徒たちも活動のことを中学に入學する前から知っています。先輩から後輩に対して

も体験が伝承されています。間伐の時、営林署の方が「のこぎりなんかできっとたらますます誰もしなくなるに」と言われたら、栗本さんが「だからのこぎりを使うんや。簡単なことや」と思って欲しくない」とおっしゃった。重みのある言葉でした。

植林をしている山は学校のすぐ近くにあります。山に出かける際のバス・のこぎり・ヘルメットを村から出して頂いていて、学校の負担はありません。支援体制はソフト・ハード共に非

常に手厚いですね。村の支援なくして活動はなりたちません。

―せっかくな活動をしていても、中心となって活動している方の異動で活動が途切れてしまうこともあるそうですね。

教員は異動してしまいましたが、ここでは栗本さんや山に関わっている方々からの引継ぎがしっかりしています。そういう意味ではこの村だから出来ることなのかなと。地域の学校、という意識です。保護者も同じ活動をしてきた世代なので、みな知っています。

―コカ・コーラ環境教育賞に最終ノミネートした理由は何だと思われますか？

昨年度の最終プレゼンを動画で見ました。地域に密

着した濃い活動を通じ、学んでいるところを評価されたのかなと思います。活動に裏打ちされた、自分たちの想いをどれだけ伝えられるかが大きかった。

―生徒が達成感を感じるのどのような時だと思われますか？

目に見える変化があったときですね。例えば35分の年輪を見て時の重みを感じるとか、木を伐る前と後で森の写真を比べて明るくなったよねとか。昨年植林したところが変わっているといった、変化・手ごたえがないと達成感を味わえないです。

良質な体験をすること。表面的な体験だけで無く、背景を考えさせる

―これから環境教育をやるう

と考えている先生方にメッセージをお願いします。
重要なのは良質な体験をすることですね。良質というのは、体験の中に理念・志があるようなものことです。目に見えることを見ることも大切ですが、目には見えない物事の背景を生徒に見せたい。追求しても深みが無いと、なるほどと思えない。そういう活動を見つければしめたものだ。そのためには「いい人」に会うことですね。

以前赴任していた学校でも、総合的な学習の時間に環境教育を扱うことはありました。しかし、自分自身の指導の至らなさに故に、人々の行為・行動の背景にある「生き方」に目を向け、自分の生き方に返すまでの指導

は十分にできませんでした。活動を終えたら、そこから生徒に本質を考えさせるようにしないと、もったいないのではないのでしょうか。

これは総合的な学習の時間に限らず、他の科目でも言えると思います。私の専門は保健体育ですが、社会科で消防署を扱う際、ある消防士の方を取り上げたことがあります。その方の行動を見た上でなぜそうしたのか、決断を下した理由は何かを資料から追求するのですが、最終的にはその人が人命を守ることがいかに大切に思っているかを考えます。

行為・行動の背景は何かをこどもたちに考えさせるわけです。

Interview 04

第17回 コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」優秀賞
三豊市立下高瀬小学校



教員歴27年、社会科を担当されている、萬亀 弘吉(まんき ひろよし)先生。
趣味は、阪神タイガース。

「児童の想いをカタチに」 主体的な児童を育てる教師と地域

―平成18年度から活動を始めたとお聞きしました
が、そもそものきっかけはどのようなものでしたか？
萬亀先生(以下、萬)・・・きっかけは、5年生の学級から

始まったんですけれど、4年生までの学習を振り返って、総合的な学習の時間でどのような内容を取り扱ってきたか、私も赴任したばかりだったので、それを樹形図にまとめていきました。キーワードを基に児童たちと。そうすると、一番端っこにでてきたのが環境、地球温暖化だった訳です。それがまだ学習が不十分だったと、児童たちに教えてもらったということなんです。それで、聞き取り調査をして、川が環境が変化してきたとか生物がいなくなったとか、昔と比べて暖かくなってきたことなどを聞いて、そこを学習していこうとなった

のがきっかけです。それに加えて最近の実態から物を大事にすることを教えたいと思って、それを目指していきました。そこで「自分たちができることは、何だろう」と話し合いをして省エネ活動に取り組むことになりました。その活動の中には、他団体の方と連携して実施していただいたものもあるんですけど、2年間の活動をもとに自分たちで省エネ活動に取り組むとともに、発信して省エネを広げることができたらいいなあって思ってやってきたんです。その1つが、そのときの児童のメンバーが中心となって作った「下小もったいない憲法」で、今もその考えを受け継いで活動しているんです。

環境教育でも同じで、物の背景にある人の営みに目を向けることもたちになってくれば、大きくなってからも物事を簡単に諦めたりしないでしょう。文部科学省がいうところの「生きる力」にたどり着けるのではないのでしょうか。そのための人材を見つけてくるのが我々の大事な仕事だと思います。私が新しく活動を始めるならそうしますね。幸い、この村では最初から「いい人」がいて、いい活動がありました。こどもたちには伝えたいと思うような、崇高な願いを持って活動している人とじっくり話が出来れば、教材研究はばっちりじゃないでしょうか。

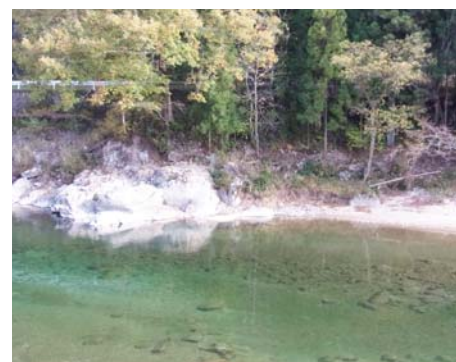
環境教育の活動にはある地

域でないと出来ないことも多いですが、活動の本質、狙いが分かれば自分たちなりに応用できることもあるはずです。
―先生の言葉を全国に発信させて頂きたいと思います。
恥ずかしいなあ。写真はかっこよくお願いします。
―貴重なお話、ありがとうございます。
こちらこそありがとうございます。
動を再認識できました。

この後井上先生は山や植林に関する授業で使ったワークシートについても解説して下さった。生徒たちがただ聞いたことを書いて終わり、とならないように工夫しているとのことだった。
シートでは、先生からの問



隣町にある最寄りの白川口駅。ここから川に沿って更に山の中へ。



学校の目の前を流れる白川。名前の通り白い岩が目立つ。この他に赤川、黒川もあるという。

この中学校は隣町にある最寄りの駅から車で約30分の山中にある。その時お世話になったタクシートの運転手が東白川中のOBであった。話によると約半世紀前、学校の授業ではないがすでに山に入る活動は行われていたそう。当時は夏休みに山で合宿をし、冬に備えて薪作りをしたという。
「好きな娘と過ごせるのがうれしくてねえ」
青春の甘酸っぱい思い出を笑いながら話してくれた。またこの村ではツチノコに懸賞金が掛けられ、年に一度探索イベントも開かれているとい

COLUMN

う。他にも川の名前「白川」が、実は源平合戦の旗の色に所縁があるなど、ロマンに満ちた村でもあった。
植林は昔から林業を産業とし、山と共に生きてきた地域だからこそ出来る活動である。しかし、地域を大切に想う気持ち、そして生徒に本質を感じさせようとする教育の姿勢は、地域性に左右されないものではないだろうか。
また、先生は「いい人」を見つけてくることで生徒たちに良質な体験をさせることが出来るとおっしゃったが、教育に対する理念をしっかり持っているという意味では先生自身もまた「いい人」だったように思えてならない。

児童の意識を高めるには どうすればいいか

「一年間で活動を色々やられていますが、年間を通してこれをやるというテーマのようなものはあるのでしょうか？」

萬：色々活動はありますが、目的は一緒なんですね。ただ、今まで色々なところへ行って、活動の情報発信をしたり、機会を捉えて様々な活動に参加したりするようになっていくんですね。その方が、児童の意識を高めますし、活動にも広がりが出ますしね。



保障すること。児童たちがやりたいっていうことを私たちが実現させることです。行動する時は、どういう風にすればいいのか、児童自身に調べさせます。そこでじっくり計画を練ったり、調べたりしてきたことを実現させるように教員ががんばって支援していきます。ただ、そこまでやっていても、年間を通して途中で児童がくじけてきますので、そのときは児童に「これは君たちがやりたいって言って始めたことだよ？責任はどうする？」と言って、できるだけ児童に任せます。ただ、目くじらたてて絶対やりなさいということではなく、失敗等したらそれはしっかり助けて、次の活動など児童に判断をなるべく

「環境教育を始められて以前とは違うなと思う児童たちの変化等感じますか？」

萬：児童たちが省エネ意識を持ち、教室の照明を使わないときは消すという具体的な行動につながっていることがあげられます。また、自分でテーマを決めて活動していくと、意欲的になります。課題に沿って努力して一生懸命取り組みますね。やはり、目的を持っているからそうなるんですね。今年で6年目になるんですが、最初の年は自分たちが作ってきたって言う意識が芽生えて、その次の学年は先輩のものを引き継ぎ、広げていくという形で、モチベーションを維持しています。活動される際に参考にする教材や人物等ありますか？



萬：特にないですよ。それは児童たちの発想が一番だと思うからなんですよ。こういう実験や勉強がしたいといった児童の想いですね。ただ、何もなければできずうなことを提示してみても、「おもしろい！」っていう反応であれば、「じゃあそれやってみようか！」というようになります。あとは、支援して頂いている方のお話を伺ったりしてヒントを頂いていますね。最近であれば、コンポスト(生ごみや落ち葉などを発酵腐熟させた肥料を入れる容器)を使った活動をしているのですが、担当グループのリーダーが毎日コンポストをかき混ぜて記録をつけているのです。そして、カメラも使っているよと私の机に置いたら、たりとか、林業についても視点が移っていきますね。こうしたことから間伐の体験を実際に行ったりして、いろいろな関連が生まれ、自然と年間を通して環境教育の授業を行えるようになっていくんですね。

「よく担当の先生が変わるとそのような環境教育を初めとした活動を止めてしまうケースがありますが、そのことについてはどのようにお考えですか？」

萬：そういうのはどこでもあると思うのですが、それを持続しようとする風土とか伝統、体制を作ることが大切だと思いますね。あとは、外に向けて発信すると、学校のイメージが「環境教育」とつくとその伝統や風土が生まれますよね。あとは、

カメラも使って毎日写真撮っていますね。やはり児童一人ひとりが自分たちで設定したテーマに関わっているの、責任感もありますね。

どのようにして児童に 主体性を見いだすのか？

「困ったときに参考にする物がありますか？」

萬：初めは文献等を参考にしていました。最近では児童たちがやりたいと言ってきたことを、どう実現させるかを考えることにしていますね。そうすると責任感も出て児童一人ひとりに主体性が出てきますね。そうさせるには、まず1つは目標を持たせること、2つめに自分たちの力で発信したり、行動したりする機会を



委員会を作って年間を通じた活動を行うとかですかね。最後にこれから環境教育を始めようとする方へメッセージをお願いします！

萬：私は、偉そうなことを言える立場にありませんが、まずは失敗を恐れず挑戦してみることでいい！そしてできた繋がりを大事に、活動に参加してもらった後は必ずお礼状を書くとか、人との繋がりを大事にして下さい。

活動団体の歩み

ここからは第16回〜第18回
コカ・コーラ環境教育賞の受
賞団体より、13団体を取り
上げ、その活動内容を詳し
く紹介します。

前半の1、2ページでは活
動団体の歩みと活動の詳細
が時間軸に沿って説明され
ています。後半の3、4ペー
ジではその団体の活動の中
から1つの活動に注目し、
1日のタイムスケジュール形
式で記載してあります。環
境教育の現場を具体的にイ
メージし、実践につないで頂
けると幸いです。

07	06	05	04	03	02	01
京都府 京都市立蜂ヶ岡中学校	愛知県 刈谷市立小垣江小学校	北海道 NPO法人 バイオトップ・イタンキン室蘭	香川県 三豊市立下高瀬小学校	岐阜県 加茂郡東白川村立 東白川中学校	青森県 南部町立名久井小学校	沖縄県 浦添市立港川小学校
P49	P45	P41	P37	P33	P29	P25
13	12	11	10	09	08	
鳥取県 彦名地区 チビツ子環境パトロール隊	沖縄県 久米島ホテルの会	滋賀県 東近江市立能登川南小学校	埼玉県 さいたま市立日進小学校	栃木県 葉鹿エコクラブ	秋田県 潟上市立大久保小学校	
P73	P69	P65	P61	P57	P53	



学校・自治体・専門家など、地域の強い繋がりから成る環境保護活動

地域の海をテーマに、児童の自主性を尊重した継続的な学びの活動

平成17年度から、4年生の「総合的な学習の時間」において、地域の海(通称:カーミージー)をテーマにした環境整備や生物の移植活動などの保護活動と、身近なごみ問題を扱った単元で、「環境」について年間を通じて継続的に学び活動を行っている。特に、カーミージーをテーマにした活動では、児童の自主性や選択を尊重し、自然や社会、そして人間が繋がりがあって生きているということの一つ一つの活動を通じて、児童に感じてもらいたいと考えている。

- ・活動年数/7年
- ・活動地域/カーミージーの海(手つかずの自然海岸及び海のことを指す)
- ・連携/地域の自治会、海の専門家
- ・第18回コカ・コーラ環境教育賞 活動表彰部門 大賞受賞

沖縄県本島の南部に位置する浦添市、その中心部に港川小学校はある。
2011年には創立32年目を迎え、環境教育はもちろんのこと、道徳教育にも力を入れている。

2005

活動開始

地域の方々や、保護者の協力を得ながらのカーミージーについての講話・観察会を行う。

観察会後には、意見交換を行うなどしてまとめ学習を行い壁新聞での発表や、地方紙(琉球新報)紙面で掲載されるなど、情報の発信を行った。

2007

浦添市民里浜フォーラムに参加。
研究した学習の成果を発表し、壁新聞等で環境保全広報活動を行う。



地域の海をテーマとした活動

カーミージーの埋め立て計画が持ち上がり、活動が本格化。カーミージーにおける観察会をはじめ、自分達にできる環境保護活動とは何なのかを話し合い、生き物の移植やゴミを拾うなどの環境整備を行う。また、それらの活動を新聞にてまとめたり、各種会議やフォーラムにおいて報告している。

2008

「生き物救出作戦」として、地域の方々などと連携協力し、生き物の移植を行う。



2009～

「KODOMOダイバシティ」に4年生・5年生の代表が参加。地域の自然を守る活動の報告を行う。

2010年・沖縄県内子ども環境会議に参加。将来、地域とどう関わっていくのかを発表した。

2011年・「テレビ会議40の声」に参加。港川の良さを発表した。

2011

第18回コカ・コーラ環境教育賞
活動表彰部門 大賞受賞



その他の活動

「ゴミ減量プロジェクトin港川」

身近なゴミ問題から地球規模の環境問題に発展させ、自分にできる環境保全活動に取り組む主体性の育成を目的に活動している。

今後の展望

より多くの市民にメッセージを発信し、自分達の手で地域を守る・残すという活動への参画が継続的にできるよう取り組んでいきたい。

「カーミージー」とは…
沖縄の方言で「亀の背中」の意味

準備

事前チェック
～海歩きに出かける前に～

- ・潮の干潮をチェック
- ・天気と風の観察
- ・海をよく知っている人と行くこと
- ・持ち物
帽子、日焼け止め、サンダル・ぞうり
まきタオル、着替え、メモ、カメラ、
ビニール袋、水分(水筒)

あると観察に役立つもの

小さなカップなどの入れ物、
スコップ、わりばし、虫眼鏡など

観察のポイント・マナー

- ・生き物はその場で観察する
→観察したら元の場所へ帰す
生き物は持ってかえない
- ・ひっくり返した岩は元に戻す
→産みつけられていた卵が
乾いてしまうかもしれない

参加者の流れ

学校出発

カーミージー到着

観察開始
ポイントやマナーなどについて指導を受ける

観察終了

カーミージー出発

学校着

指導者の流れ

教員はバスにて引率
保護者などは現地集合

保護者は係を分担し、児童のサポート

旗係・観察制限区域に入らないようにする
救急係・本部テントだけが人の対応
テント係・テントを設営
トイレ係・公民館まで車で連れていく
(近くにトイレがないため)

こどもたちの安全確認
観察をしつつ、観察のポイント・
マナーについて児童に指導する

テントや旗などの撤収作業

保護者などは現地にて解散

当日

12:40

13:00

13:15

14:45

15:15

15:30

指導者の感想

児童たちにカーミージーの現
状を体験的に知ってもらうこと
で、「地域の環境を守らなけれ
ばならない」と大人が教えるの
ではなく、自分達で感じて、行
動してくれるようになったと感
じている。

当日の成果

実際に観察を行ったことで、児
童達のカーミージーについて
の理解が一層深まったと共に、
保護者への参加を募ることで、
保護者の地域環境に対する興
味・関心も高まったものと考え
られる。

北の大地で確かに育つ、故郷と自然を想う心

今後の展望

環境学習では、縦割り班でのクリーン作戦、アルミ缶のリサイクル、子どもエネルギー環境サミットの拡大開催を考えている。



科学と地球とふるさとの未来を信じ、希望と展望を持つ「未来への挑戦」

生活科や総合的な学習の時間を通し、ふるさとを愛し自分たちの住む地域や自然に誇りを持つ心を育てる「ふるさと学習」や、身の回りの自然や環境を取り巻く問題点を見つけ解決方法を探り未来を創造する「環境学習」を行っている。全校をあげての取り組みや学習の成果の積極的な発信が評価を挙げている。

- ・活動年数/約6年
- ・活動地域/青森県南部町周辺
- ・連携/八戸工業大学、青森県三八地域農林水産部、他
- ・第18回コカ・コーラ環境教育賞 活動表彰部門 優秀賞受賞

2011現在

ノー電気デーの実施

子ども環境サミット

地域での環境フォーラムの実施

第18回コカ・コーラ環境教育賞
活動表彰部門 優秀賞受賞

鮭の放流活動

ふるさと学習から環境学習へ

発信する力が重要と捉え、他地域の子どもの前で発表をしたり、交流ができる場所を設ける。



CO₂削減の課題は学校だけではなく、地域レベルでの取り組みが重要だという意見から6年生を中心に。



「元気に帰っておいで」なんとなく見つめていた川を良く観察するように。



総合学習の時間で、ふるさとを題材に授業をしようという話に。ふるさとをみつめたら環境の問題だった。



ふるさと学習では・・・

- ・ふるさとの生き物や植物の「飼育栽培活動」(低学年)
- ・地域を流れる「如来堂川から見つめる」ふるさとの環境問題(4年生)
- ・地域の農業と環境を考える「名久井農業達人」(5年生)
- ・「悠久の大地に学ぶ」ふるさと学習

環境学習では・・・

- ・環境紙芝居、学校の無駄探し隊(1年生)
- ・リサイクルおもちゃ作り、廃油エコ石鹸作り、エコろうそく作り(2年生)
- ・ゴミを減らすぞ!買い物ゲーム、エコポスター大作戦(3年生)
- ・省エネゲーム、温室効果ガスの働きを知ろう、エコクッキング、環境作文、走れ!私たちのソーラー電動カー!(5年生)
- ・新エネルギーについて、輝け!エコイルミネーション(6年生)

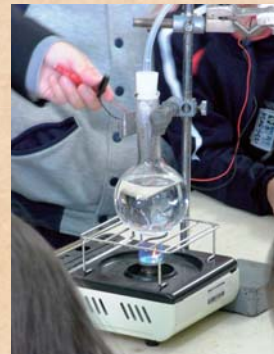
準備

参加者

小学4年生30人程度

準備する物

風力発電キット(プロペラ、発電機、電子オルゴール)、太陽光発電キット(光源、ソーラーパネル、LED電球)、水力発電キット(水、プロペラ、ホース、発電機、LED電球)、火力発電キット(フラスコ、ガスバーナー、ゴムチューブ、プロペラ、電子オルゴール)、ワークシート



- ・フラスコに入った水が熱されて水蒸気となる
- ・チューブを伝った水蒸気がプロペラを回す
- ・プロペラの動力で発電機が回り、電気が発生して電子オルゴールが鳴る

参加者の流れ

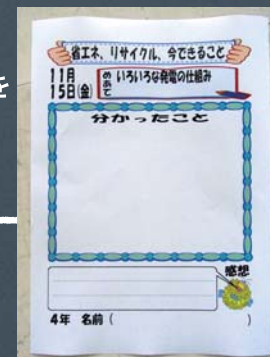
教室に移動

発電方法を発表する
火力発電、風力発電、太陽光発電、
水力発電、原子力発電…

発電の仕組みを考える
意見の例：
風力発電→風でプロペラを回す
太陽光発電→光電池に光を当てる
原子力発電→ガス?わからない



今日の授業で学んだことを
ワークシートに記入する



終了

指導者の流れ

実験器具の準備

こども達にどんな発電方法があるか
問いかける

その発電方法はどういう仕組みで電気を
生み出すのか、こども達に答えてもらう



実験器具を使い、
実際に電気を起こして見る

今日の授業で学んだことを
ワークシートに書いてもらう

実験器具の片付けを行う

当日

09:00

09:30～

09:35～

09:45

09:45～

10:00

10:00～

10:10

10:10～

当日の成果

授業前は児童間の知識量の差が目立ったが、他の児童の意見を聞き、実際に発電してみると環境意識の共有が出来たようだった。

今後の活動について

ノー電気デーや新エネルギーを考えるものづくり等を通し、電気・エネルギーの大切さを全学年通し引き続き学んでいく。

指導者の感想

エネルギー学習は環境問題を捉えるにあたって重要。この学習をしたら何が起こるのか、何に役に立つのかということを積極的に教えている。
こども達には地球温暖化という問題と節電を結び付けて考えて欲しい。

植林を通して人と人、過去から未来へのつながりを感じさせる教育

植林などの体験活動を通して環境を守ることの大切さを学ぶ

環境についての調査や植林などの体験活動を通して自然を守る人々の思いを知り、環境を守ることの大切さを学ぶとともに、生徒たちが活動に積極的に参加していく態度を育成する。

- ・活動年数/約62年(昭和24年より植林を開始)
- ・活動地域/東白川村地区周辺
- ・連携/東白川村役場
- ・第17回コカ・コーラ環境教育賞 活動表彰部門 優秀賞受賞



【林業体験】

植林作業(4月下旬)

入学したばかりの1年生が山に入り、緑化少年団への入団式と植林活動を行う。山を大切にする気持ちを学んでもらう。

枝打ち体験(9月下旬)

1年生が山に入り、枝打ちを体験する。ただ植えるだけでなく、手を入れていく必要があるということを学んでもらう。

【調査】

源流調査

1年生が村を流れる白川の源流を見るために山に入る。

水質調査

源流と中流・下流の水質をそれぞれ調べ、比較する。上流の水を大切にする気持ちを生徒たちが自発的に持つことをねらう。

2011現在

2010

第17回コカ・コーラ環境教育賞
活動表彰部門 優秀賞受賞「つながり」を
意識させる活動自然を大切にする心や
郷土を愛する心を育む活動『植林体験と同時に、
緑化少年団に入団します。』

【実践発表】

ふるさと学習発表会

1月に実践の発表を行う。課題発見から取り組み、結果等について発表する。保護者や地域の方にも見て頂く。自分の意見をはっきりと言えるようになることがねらい。

枝打ち体験の様子。あえてノコギリで枝を切ることで、林業の大変さと時間の重みを知る。

『10年ほど前から植林を
総合学習に取り入れている』

1970

緑化少年団を結成

『早く大きくなあれ!』



1955~1975

村内の山で一泊二日の活動を行う

植林活動の様子。植林自体はかなり前から行われていたらしく、昔は山に入って薪を作ったりもしたそうだ。地元の方の指導の下、1日で約1000本もの苗木を植える。

1949

植林・薪作り
作業開始

間伐の様子。あえてのこぎりを使うことで、林業の大変さを感じてもらおう。

『樹齢はどのくらいなんだろう?』



準備

ねらい

ずっと山に関わってきた地元の方から話を聞くことで、自然を大切にする心や郷土を愛する心を育む。また自分たちや先輩たちが植えた木の様子を見ることで、自分たちの活動が一つの「つながり」の中にあることを自覚させるねらいもある。

人数

参加人数:約30人
生徒:約25人
(1年生全員)
指導者:約5人
(先生、役場の職員の方)

準備する物

学生:軍手
指導者:スコップ、軍手、
苗木(約1000本)、土

事前に地元の方との打ち合わせ(植林場所の決定)、また学校行事のためHRで告知を行う

参加者の流れ

集合

緑化少年団入団式

午前の植林

昼食

午後の植林

解散

指導者の流れ

集合

緑化少年団入団式

午前の植林

昼食

午後の植林

片付け

当日

09:30

09:30~
10:00

10:00~
11:30

11:30~
12:15

12:15~
13:30

13:30~

まとめ

- 学校便りへの掲載
- ふるさと学習発表会での成果報告
- 緑化少年団としての活動報告

学校の指導目標として掲げている「たくましく生きる」=自分で課題を見つけ、粘り強く解決する人材の育成に結び付ける。

主な活動は1年生が行うが、2年生・3年生も1年生の発表を通して環境に対する意識を継続していく。

「児童の想いをカタチに」主体的な児童を育てる教師と地域

身近な省エネ活動 「楽しく省エネ」

児童自らが地域や社会の知恵に学びながら、エネルギーを大切に使うために「自分たちに出来ること」を発見し、実践し、広げていく。そのようなねらいから自分達の生活を徹底的に見直し、身近なところで出来ることを中心に活動している。

- ・活動年数/5年
- ・活動地域/香川県三豊市立下高瀬小学校周辺
- ・連携/地域、専門機関
- ・第17回コカ・コーラ環境教育賞 活動表彰部門 優秀賞受賞

地域や専門家との連携

- ◎田植え、ゴミ拾い、アイガモ、脱穀、販売まで地域との関係は密であり、多くの専門家とも積極的に連携。
モチベーション維持の工夫
- ◎発信に力を入れる。地域のみならず、全国的かつ世界的に発信し、児童に社会を変えていく目標を持たせている。



2011現在

省エネを進める 第17回コカ・コーラ環境教育賞
環境づくり 活動表彰部門 優秀賞受賞

2010

地産地消の米作り もったいない
おぼけバスターズ

田植えなどの手作業や合鴨農法、料理教室等を地域の方から学び、自ら体験することでその良さを学んでいる。
(毎年実践)



『活動をする上で、自分達が地域の人や専門家の方々に支えられていることに気づき、“ありがとう”と感謝する心を持つ。』

毎週火曜日のアルミ缶リサイクル運動
校舎2階に下小ガーデンを造り、屋上緑化を推進。

菜の花プロジェクト

間伐体験

間伐の必要性を学び、切り出した間伐材を使ったコースターや表示板、果箱を製作して校内に設置。積み木を制作して低学年にプレゼント。
(2010、2009年)

「ものや人に感謝し、大切にすることの育成」

活動を通して、児童が主体的かつ実践的な態度をはぐくみ、また自分たちの生活を支えているものや人に感謝の心を持つことが長期的なねらい。

2009

省エネ委員会活動開始 「下小もったいない憲法」制定

毎日、校内の使用電力量を計測し、CO2排出量とともに校内放送で全校生に知らせ、節電を呼びかけている。



下小もったいない憲法

- 1条…だれも使っていない部屋の電気は消しましょう
- 2条…持ち物に名前を書いて、最後まで大切に使いましょう
- 3条…リサイクルをしましょう(ごみの分別、わりばし、アルミ缶)
- 4条…水を大切に使いましょう
- 5条…好ききらいなく食べましょう
- 6条…お家にも省エネを広げましょう

2008

「下小もったいない憲法」制定

6条の省エネ項目(下記参照)で、全校的な省エネ活動の基盤になる。

『エコバックの利用や、近くへの外出は自転車を利用するといった意識が定着。【6条】』

『H18からH21にかけて、給食残菜量92%削減。【5条】(H17年度と比較)』

『電気の無駄を減らそうとする意識は全校の96%に及ぶ。【1条】』

2006

環境・エネルギー
教育スタート

主に5年生の総合的学習活動を中心に行う。

準備

注意事項

事前学習を始める前に専門家との連携を図るのが良い。なぜ間伐が必要なのか、どんな内容と絡めてどうやって教えるのが良いか、アドバイスを受け授業計画を立てる。専門的知識の指導は無理に行わず、専門家に任せる。

事前学習

割り箸についての学習
森林の大切さの学習
森林レポート(夏休み)
間伐の必要性を確認する学習

参加人数：5年生 37名
準備する物：ボード、筆記用具、
軍手、水筒、着替え
服装：ジャージ、運動靴

事後学習

森林の恵みを活用
コースターや積み木の制作
積み木を低学年にプレゼントしよう

参加者の流れ

点呼

間伐体験場所へ移動

今日の活動について
間伐体験
(道具の使い方／間伐について)

グループで協力して、枝打ちや丸太きりに挑戦
木の皮をむいて、色や香りを楽しもう

指導者の流れ

当日

08:00～

08:15

登校
点呼
当日の流れについて確認

08:15～

09:00

小学校出発(バスで)

09:00～

09:30

香川県森林センター着
次の事項を確認
間伐の大切さについて
今日の活動について

09:30～

10:00

間伐体験で安全を確認しながら指導
3グループで各1本の間伐

10:00～

11:00

枝打ち、幹(丸太)切り
搬出作業

11:00～

12:00

森林センターで閉会

12:00

小学校着

まとめ

児童の感想

疑問に思っていた点が解消し、
また新たな疑問などが浮かび、
次の活動へ発展できそう。

指導者の感想

児童が考えていた間伐の大切
さを、身をもって体験すること
で実感することができたようだ。

まとめ

日頃の学習と体験が結びつく経
験をし、より考えが深化する。

「獲物のあるビオトープ」を造成し、こども達の健全な生長を促す

立ち上げ秘話

太平洋に面した断崖絶壁にハヤブサが営巣し、内浦湾にはクジラやイルカが回遊するなど「自然が豊か」と言われる室蘭市。しかし、こどもたちの指にじかに触れることのできる「身近な自然」がすっかり失われてしまっているのが実態である。そこで、こどもたちが実際に触れることのできる身近な自然をつくるため、この活動を始めた。



ビオトープで地域のこどもたちを対象に自然体験学習

失われた室蘭の湿原復元を目指し、1998年からビオトープ造成を行ってきた。2011年にビオトープの造成計画が完成し、自然観察会を行えるほど沢山の動植物が生息したビオトープが誕生した。地域のこどもたちを対象に、生物を観察・採集できる自然体験学習が定期的に行われている。



- ・活動年数/6年(準備期間を含めると14年)
- ・活動地域/北海道室蘭市潮見公園
- ・連携/北海道室蘭市(「室蘭市ビオトープ」を制定)
- ・第18回コカ・コーラ環境教育賞 活動表彰部門 優秀賞受賞

2011現在

2010

2007

2006

2005

2002

1998

第18回コカ・コーラ環境教育賞
活動表彰部門 優秀賞受賞

《ビオトープ造成期間》

2012年春…

ビオトープ造成計画完了!!



沢水を引込んで、およそ15m²の浅い池に



自然観察池、湿地、水路などの造成スタート!
3m×5m=15m²の防水シートを地下60cm埋設し、その上に沢水を引き込んで水深30cmの浅い池を作る。年々池は大きくなっていく。

長年の活動と働きかけ、時代の風の変化もあって行政から「公園施設設置の許可」が出るようになり予定地での造成が可能となる。しかし「許可」は予算措置を伴わないため、自然保護・環境教育に理解ある企業・団体の助成を仰ぎながら造成を進めることに。

NPOへと
組織を法人化。

ビオトープ・イタンキの会設立

会のNPO法人化。
実生で育てた苗木の潮風最前線への植樹開始。



行政の理解を
なかなか得られず…

独自に下記の活動を行いビオトープ作りに向けて準備を始めた。

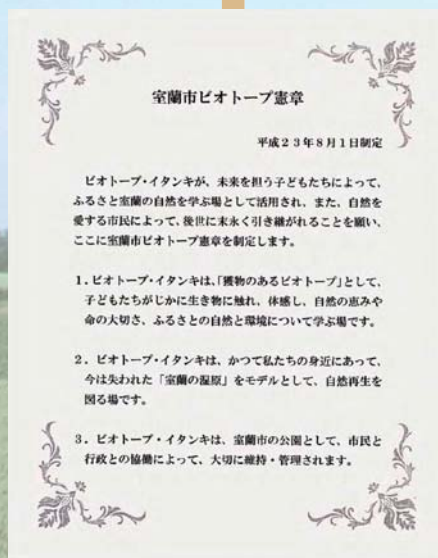
- ① 小さな先行実験池を作り、室蘭在来の湿地性の動植物を救出し繁殖・保存
- ② 地元海岸の潮風に耐える樹種を調査、苗木を育成
- ③ 近郊のヘイケボタルを累代飼育・増殖と放流準備

有志を募り活動スタート!

行政にかけあい、潮見公園の湿地を回復し「自然回復促進の作業」「利用活用の指導」を行うことを提案。



ビオトープ・イタンキの活動が評価され、8月には行政により活動の趣旨に沿った内容で「室蘭市ビオトープ憲章」が制定された。



準備

事前準備

「獲物のあるビオトープ」では子どもたち各自の知恵と技がものをいうのであって、事前に指導者が特に準備する教材などはない。ただし、指導者は黒子として常々ビオトープが限られた条件の中で多様性など良い状態を保つように、そして、質問された事柄について十分な説明が出来るよう心がける必要がある。

参加人数

1学年100名程度
(小学3～5年生が中心)
新聞公募の観察会では10名程度の事も。

準備する物

学生:長靴とアミ、持ち帰るためのプラケースや虫かごなど
指導者:30～45cm水槽2～3個、ゲットした生き物を入れ種名などを確認する。

参加者の流れ

集合

自由に採集、ゲットした獲物は大きな水槽へ入れる

自分達で捕った生き物の種名を確認、生態などを知る

飼育など持ち帰るものを選別、他は池に戻す



解散

指導者の流れ

事前準備

集合(簡単な挨拶と場所の説明)

子どもたちと共に参加

子どもたちの捕った生き物の種名を確認、生態などを説明

挨拶、まとめをして終了

解散

当日

08:00

09:00～

09:10

09:10～

10:30

10:30～

11:45

11:45～

12:00

12:00～

12:00～

当日の成果(一例)

チョウ(2種)
アキアカネ多数
シオカラトンボ♂♀少数
オオルリボシヤンマ1匹
ミズカマキリ2匹
コオイムシ5匹
トンボのヤゴ多数(ほとんどがシオカラトンボ、ヤンマのヤゴも少し)

指導者の感想

長年の活動が現実のものとなり「形」を現わしてくるにつれ、各方面から評価を受け、注目されるようになってきました。「獲物のあるビオトープ」は環境教育としてあまり前例が無いと思われます。方向性を誤らないように活動を続けたいと思います。

客観的な事実

- ビオトープ造成については、2011年春までに2000㎡の水域造成を完了。行政の対応も変化し、8月には活動の趣旨に沿った内容で「室蘭市ビオトープ憲章」が制定された。
- 自然再生については、順調に経過して多くの生き物が見られるようになり、ホタルの復活も実現、カワセミも姿を見せるようになった。潮風最前線の植樹も初期のものは10歳を超え高さも3～4mに育ってだいぶ木立らしくなった。
- 自然観察会の開催数も増え、2011年は授業としての自然体験学習が3小学校、ホタルの市民観察会は12日間延べ420名が参加、トンボの羽化など季節のテーマに沿って呼びかける観察会が2回行われた。

指導上の注意点

「獲物のあるビオトープ」を良い状態に保つために指導者は多くのことを考え活動するが、参加者に対する「指導」はなるべく行わない。基本的に子どもたちの好きにさせる。採集、飼育など子どもたちが小さな生き物にかかわるということは、現実にはその生き物を死なせてしまうことがほとんどだが、このことを積み重ね体験する時こそ命の「はかなさと大切さ」が理解されていくと考えている。

地域に学び、地域に発信する、ふるさとを愛するこどもの育成

今後の展望

ホタルの保護活動などを通じた、小垣江地区のさらなる美化活動など、地域貢献や環境保護活動の啓発活動の継続。また、ホタル活動を行っている全国の小学生と情報交換を行い、自分達の活動の発展にも役立てていく。



ふるさとにホタルを増やしたい!という願いのもと広がる環境保全活動

「ホタルがいっぱい飛ぶ小垣江にしたい!」という願いのもと、地域の環境保全について考え、自分たちができる活動を通じて、地域全体にホタル保護活動について発信、小垣江地域をも巻き込んだ環境保全活動を行っている。

- ・活動年数/5年
- ・活動地域/小垣江地区周辺(小垣江公園・折戸川)
- ・連携/緑水保全会
- ・第18回コカ・コーラ環境教育賞 活動表彰部門 優秀賞受賞



2011現在

第18回コカ・コーラ環境教育賞
活動表彰部門 優秀賞受賞

学区内の介護老人施設へホタルの幼虫をプレゼントし、大変喜ばれる。今後もこのような、地域との関わりを続けていく予定。

青少年赤十字研究発表会において「よみがえれ! 小垣江ヘイケボタル」というテーマで、環境改善の提言の試案作り・環境保護活動の見直しについて発表した。

- ◎5260匹もの幼虫の孵化に成功し、カワニナの飼育も開始。
- ◎「緑の小道」環境日記コンテスト(環境省主催)では、4人の児童が全国入賞をはたす。
- ◎ホタル活動の成果「こどもホタルレンジャーレポート」(環境省主催)では、優秀賞を受賞。

2011

折戸川周辺の水質調査、環境調査を行い、環境マップを製作。



『ホタル新聞』を作成し地域に配布。地域の方へ広報活動。

「小垣江ホタルレンジャー隊」を結成。
ゴミ拾い活動や竹炭隊などユニークな活動を行い、小垣江公園の美化活動を行う。

2010

校内の飼育活動だけでなく、小垣江地区の環境を守る活動へと年々活動範囲が広がっている。

小垣江公園でホタル祭りを初めて開催。
年々、参加者が増え、2011年には、
2日間で1000人ほど訪れる。

緑水会からホタルを守る活動と呼ばけられ、ホタルの飼育を開始。

緑水会と協力し、校内と小垣江公園にホタル小屋を作る。参加者が中に入って鑑賞できるように遊歩道をつくる。
小垣江小学校の4年生と保護者、地域の方でこのホタル小屋にホタルの幼虫を初めて放流。

ホタルの孵化に初めて成功する。



準備

準備する物

各隊に必要な物を児童が考えて、準備しておく。

第1回ホタルレンジャー活動内容

クラス6つの隊に分かれ、活動を行う

参加者

4年生108人 担任3人
緑水会（地域の自然保護団体）8人

場所

小垣江公園周辺、折戸川、湧水池（ホタルの幼虫を放流した場所）

参加者の流れ

集合

始めのあいさつ

グループに分かれて活動

えさふやし隊、自然ふやし隊
水をきれいにし隊、外敵つかまえ隊
水生生物調査隊、ごみひろい隊

片付け・帰る準備

終わりの会（まとめ、あいさつ）

現地出発

学校着

指導者の流れ

学校出発 現地（小垣江公園周辺）へ

あいさつ
気をつけること・集合時間などの確認

子どもたちが安全に活動できているかを見守り、サポートする。必要に応じて、緑水会の方にアドバイスをもらう。

片付けの補助

あいさつ



当日

09:45～

10:00

10:00～

10:05

10:05～

11:15

11:15～

11:25

11:25～

11:30

11:30～

11:45

11:45

活動結果

子どもたちなりに考え、準備をして活動を行うため、様々な問題（例：ごみを拾ったがどうやって捨てたらいいか、自分たちの力だけでは、雑草を取りきれない等）が出てくるが、それを第1回の報告会でみんなで話し合い、次の第2回の活動に生かしていく。

当日の成果

一回の活動結果をまとめてしまうのではなく、次回にどう生かしていくのかという、次回への繋がりが強く意識されている。

指導者の感想

地域の人たちと一緒に活動することで、地域の人の温かさや自分たちと同じようにホタルを守りたいという気持ちをもって、いることを子どもたちが改めて感じる事ができた。

アジサイ栽培を通じてはぐくむ郷土愛

植林活動を中心に地域を巻き込んだ取り組みを実施

2005年から、市教育委員会が指定する環境教育の研究校として取り組みを充実させ、現在は植林活動を中心に校内に限らず地域を巻き込んだ活動をしている。

- ・活動年数/約7年
- ・活動地域/京都市右京区周辺
- ・連携/京都府、京都市、右京区(環境政策課)
- ・第18回コカ・コーラ環境教育賞 活動表彰部門 優秀賞受賞



あじさい植栽活動 立ち上げ秘話

「あじさいを植えよう」と決めた当時の井上校長先生がPTA・教職員と話し合い地域の花屋さんに相談してみました。すると二つ返事で協力してくれることになり、あじさいの鉢をたくさん寄付してもらいました。



準備

参加人数

20～30人ほど。

準備する物

ゴーヤの種か苗・土・有機石灰・肥料・支柱・プランター（野菜用など、深型長方形で20リットル以上の二重底のもの）
※地植えできる場合は不要。

園芸用ネット（サイズは10cm角）※ゴーヤは条件がよければ4階までツルがのびるため、園芸用の支柱や竹などで枠組みして、ネットのはり付けしでも良い。

事前準備：種まき

ゴーヤは、皮が硬いので、種のとがった方の先をカットして、ぬるま湯に1晩つけてからポットに2～3粒まく。芽が出て、本葉2～3枚になったら間引きをし、本葉が3～4枚になるまで暖かいところで育てる。

参加者の流れ

まず、栽培用プランターを作るために、板を切り出す。

底に水抜き用の穴を開けて、手作りのプランターが完成。

次に、プランターの中に入れる肥料と土をスコップで混ぜる。
なかなか力作業だ

次にネットづくり。
格子状に木枠を組んでネットを取り付ける。
プランターから二階まで届く大きなネットだ。

棒に伸びていた蔓をネットに丁寧に絡ませる。

完成！
使った道具の後片付けをする。

指導者の流れ

準備・運搬

生徒たちが使用する
のこぎり・釘・かなづちを用意。
安全な使用に気を配る。

ドリルで穴をあける作業を手伝う。

肥料と土・スコップを準備する

土をプランターまで運ぶ
三輪車を準備する

はしごを出して、作成したネットを
校舎の外側から二階まで張る。

生徒がネットに絡ませた蔓を
ネットの裏側から確認する。
後片付け。

当日

08:00

09:00～

09:10

10:00

10:30

11:00

11:30

12:30

まとめ

自分たちの蜂ヶ岡中学だけでなく、近くの幼稚園や保育園にも栽培用プランターを置いて緑のカーテンを作る活動をしている。

室温を三度ほど下げる効果がある。クーラーの使用を減らすことで環境への負担を減らす意味がある。また、ゴーヤの実は調理実習で活用することができ、一石二鳥だ。

9月末になると枯れてしまうため片付ける。来年もまた設置する。

地域の人・もの・環境との関わりを通したこどもの育成

地域や自分自身を見つめ、自分の生き方を考えて主体的に働きかけるこどもの育成を実施

石川理紀之助ゆかりの「草木谷」において環境に優しい農業を体験し、本校のビオトープと比較しながら生き物や環境について調べ、地域に発信している。

- ・活動年数/6年
- ・活動地域/秋田県潟上市 八郎湖付近他
- ・連携/NPOアザサ基金 湖東部水生生物研究会
NPO法人八郎湖の環境を守る会 秋田地域振興局
秋田県立大学
- ・第17回コカ・コーラ環境教育賞 活動表彰部門 優秀賞受賞



2011現在

第17回コカ・コーラ環境教育賞
活動表彰部門 優秀賞受賞

2010

全国ビオトープ・
コンクールにおいて
銀賞受賞

「三湖物語(八郎湖、十和田湖、
田沢湖)」として八郎太郎伝説
ゆかりの地域と交流

本校の実践をもとに、秋田県
立大学を中心に潟上市環境学
習プログラムを作成

2009

シンボルマークの作成とブラン
ド作りを開始



自分達の活動、地域のよさを
伝える手段(地場産のつくだ
煮等に貼られて全国各地に)
キーワードは「つながり」

2008

子どもフォーラム参加

・8月子どもフォーラム①:
茨城県の小学生と交流。司会
等の会の運営、発表などに代
表が参加。

・10月子どもフォーラム②:
本校代表児童が茨城県を訪問、
研修と交流をする

2007

八郎湖を模した
ビオトープが完成

「草木谷」における谷津田の再
生事業に参加



旧八郎湖岸の生息植物を
ビオトープに移植

学校ビオトープモニタリング
システム(気象センサー)設置

2005

学校の池をビオトープ
として造成

NPO法人アザサ基金代表の飯
島氏が来校。
霞ヶ浦での環境再生と八郎湖
の現状を知る。

ビオトープ、水生生物調査

生き物探しをし、見つけた生き物の観察から気づいたことをま
とめる。ヨシ笛を作ったりガマの穂で遊んだり身近な自然を
利用して遊びを工夫し、楽しむ。生き物のすみかや体のつくり
から、ビオトープ内の食物連鎖について学ぶ。
植物の水質浄化作用について、科学的な調査をする。(透視
度、COD)→八郎湖の現状を想像する。八郎湖岸の人々の暮ら
しについて知る。

自分達が住んでいる地域の良さに気づき、
地域の未来について考えられるようになる



準備

準備する物

網（長・短）、箱めがね、鍬、マツカ、熊手、水質調査パックテスト、温度計、水温計、指標生物シート、図鑑、バケツ、流れの調査用ボール、バット、ルーペ、デジカメ

ビオトープの管理

- 1ビオトープに生き物を持ち込まない。
- 2外来種は取り除く。
- 3ビオトープの生き物を持ち出さない。

危機管理

- ・より多くの組織や団体、地域の方々との連携による人員の確保
- ・調査地点の下見及び危険箇所の確認
- ・児童のバス等を利用した移動
- ・救命胴衣の着用

参加者の流れ

5、6年生 20人

学校集合

学校発

調査開始（馬踏川流域4地点）

八郎湖へビオトープの植物を移植

八郎湖で昼食

学校着 解散



水生生物調査と八郎湖への在来生物再生と水質浄化の取り組み

指導者の流れ

秋田県生活環境部管理課八郎湖環境対策室の方、
潟上市生活環境課の方、教頭二名

備品の準備

児童の引率

児童の安全確認
調査の指導

ビオトープの管理について指導
児童の安全確認

八郎湖で昼食

終了



当日

08:30～

08:45

08:45～

08:55

08:55～

11:30

11:30～

12:10

12:10～

13:00

13:00～

環境教育の目標

身近な環境とのかかわりや体験活動を通して、自然を愛し、環境を大切にしようとする心と実践力を育成する。

実践の重点

課題意識をもちながら、身近な環境に進んでかかわることができる学習過程の工夫

問題解決的な学習や体験活動を取り入れた学習の展開

価値観を高めることも同士のかわりと学び合う場の工夫

教諭の感想

何よりも大きな変化は、この地域が好きと答える児童が増えたことである。そして、自分たちの未来をしっかりと見据え、これから自分はどんなことをしたいか、地域の未来のために何をすべきかについて考えられる児童が多くなった。

地域を巻き込み、学校の枠を超えた幅広い活動を実施

身近な自然を通し、様々な活動を行う

身近な自然を調べ、一人ひとりが出来ることを感性の高い小学校の時期に実践を通して感じさせたいというねらいから、地域の川の生物調査や浄化活動を中心に行なっている。また、リユースをテーマに廃油からの石鹸作りなども手掛けている。

- ・活動年数/11年
- ・活動地域/栃木県足利市葉鹿町周辺
- ・連携/地域育成会、足利市(クリーン推進部)、足利市西ロータリークラブ
- ・第17回コカ・コーラ環境教育賞 活動表彰部門 優秀賞受賞



社会貢献の実感

回収した廃油を使って石鹸やキャンドルを作り、安価で提供し環境の大切さを訴えていく活動は、社会貢献していることを児童に実感させている。
収益の一部は車いすの購入に充てている。



2011現在

2010

2007

2003

1999

彦谷川の浄化活動
及び水質検査第17回コカ・コーラ環境教育賞
活動表彰部門 優秀賞受賞

親子環境学習会

廃油回収及び石鹸作り

葉鹿エコクラブ地域化

葉鹿エコクラブ設置

環境学習スタート

次ページで詳しく紹介

幼稚園との共同活動

小学校低学年の活動として実施

地域化後は、より一層多くの人の環境意識を向上させる活動を企画・運営

家庭で出る廃油を回収し、石鹸づくりを通して環境意識向上を図る

鮭の放流活動

小学校低学年の活動として実施

校内の自主的なクラブとして設置

「総合的な学習の時間」の試行としてスタート



葉鹿エコクラブの地域化

指導していた教員の異動により学習終了を危惧した保護者や自治会等によって葉鹿エコクラブが地域化される。
これによって指導者が顧問という形で指導を続けることが出来た。
環境教育活動を小学校内だけでなく、地域全体に広げている。

葉鹿エコクラブは、環境に興味のある高学年を対象に、学校の教育課程外に自由に活動するクラブとしてスタートした。
しかし、2007年3月に地域されたことでそれまで以上に地域全体で環境について考え、実践していくことが大きな目標となった。



準備

人数

平均参加人数:8人

準備する物

ペットボトル(2リットル)、CODパックテスト、EM活性液

※事前の準備物は上記の通りであるが、透明度を調べるために円筒のアクリルパイプを使って自作したものを使用している。また、PH測定はデジタル式の器具を使用。
※EM活性液は、20リットルのポリタンク7本を用意し、下流部に40リットル、中流部に40リットル、上流部に60リットルを投入している。

・COD とは

Chemical Oxygen Demand の略で、日本語では「化学的酸素要求量」と言う。簡単に言えば、水の中に含まれている汚れ(おもに有機物の汚れ)を、おおまかに数値化したものである。

・EM 活性液とは

EMとはEffective Microorganismsの略で、有用な微生物群という意味。EM活性液は、糖蜜(エサ)などの糖質を加えることによって、そのなかの乳酸菌と酵母を主に活性化させ、投入先での微生物の働きを効果的にする。

事前学習

- 1 水の汚れについて
- 2 CODについて
- 3 PHについて
- 4 指標生物について
- 5 透明度測定について

参加者の流れ

集合

上流・中流・下流の3班に分かれるグループごとに定点場所へ移動

グループごとに
1 水の採取
2 CODの測定を行う
※時間があれば、川の様子やEM活性液投入箇所付近の水生生物を調べる

学校に到着したら、採取した水の
1 PH
2 透明度
を調べ、表に記入後、EM活性液を
次回の用意として作る

以前のデータや先月のデータと比べてまとめる

終了

指導者の流れ

準備物の確認
EM活性液を投入箇所ごとに分ける
手作りの透明度測定器を確認

定点箇所へ移動

CODの測定注意
特に、水温による測定時間を正確に
ストップウォッチを使用して行う

透明度の測定では、全員の意見を
もとに透明度を決める

まとめを行う

片付け

当日

09:00～
09:15

09:15～
09:30

09:30～
11:00

11:00～
11:45

11:45～
12:00

12:00

まとめ

成果1

地域の育成会、ロータリークラブや、市のクリーン推進課にも巻き込んだ活動となり、地域の人々の環境意識を向上させる目的にも貢献している。

成果2

活動の成果の一つとしては、下流部にマシジミが見られるようになったことが挙げられる。しかし、最も大きな成果は、こどもたちの環境への意識が高まったことだと思う。

今後の活動について

今後の活動については、今後も地道に継続することと、この活動をととして生物多様性についてこどもたちに知らせていきたいと考えている。

地域が造る「子どもの心を育てる学校ビオトープ」

ビオトープを通した地域との連携

こどもと地域が一体となって自然の生態系のしくみを学習し、活動することで、地域の優しさや温かさを感じ、地元愛を育むことで地域を大切にする大人に成長することを願い日々の活動に取り組んでいる。

- ・活動年数/約11年
- ・活動地域/日進小に隣接するビオトープ
- ・連携/おやじの会、環境ボランティア、かぶと虫ボランティア
- ・第17回コカ・コーラ環境教育賞 活動表彰部門 優秀賞受賞



今後の発展性

- 1 校外の花のプランターに「環境保全の啓発を呼びかける」看板を立てる。
- 2 引き続き、校内フェンスにフラワースポット（480個設置予定）を付け、季節の花を飾り、地域の環境美化に努める。
- 3 保護者の方々に樹木の種を提供してもらい、樹木を種から栽培する。
- 4 年2回のクリーン活動（草取り、落ち葉拾い、剪定、池のヘドロ掃除、野草の移植）を通して、勤労する喜びや奉仕の心を育て、全校をあげて敷地内の生態系のバランスを整える。
- 5 オオバコ、シロツメグサ、ヘビイチゴ等の地域に生えている在来種の野草を移植し、ビオトープ内の植物の種類をもっと増やし、多種多様な生物環境づくりを行う。
- 6 ビオトープ内の湿地帯で絶滅危惧種である「タコノアシ」の繁殖地の規模を拡大する。



環境教育を支える主なボランティア組織

◎環境ボランティア

コカ・コーラ環境教育賞 大賞を受賞したビオトープの手入れをはじめ、花壇やフラワースポットの水遣り、落ち葉清掃と環境整備

◎カブトムシボランティア

自然の小道の中にあるカブトムシ村で幼虫が無事に育つように落ち葉の手入れや霧吹きなど

準備

1ヶ月を目安にアナウンス

参加人数：100名
おやじの会：30名
児童及び保護者：70名

準備物

児 童：ジャージ
指導者：軍手、スコップ

事前学習

活動一週間前の総合の学習で
学習内容の確認及び、今後の目
的や計画を立てる

備考

環境整備の他、ボランティアさんによる生き
物に関する勉強会を行ったり、秋には落ち葉
を使った焼き芋大会などのイベントを行っ
たりしている。

参加者の流れ

集合
準備物の確認
始めの会

今日の目標を確認
（親子&グループで発表）
役割を確認
作業

レクリエーション



指導者の流れ

集合
準備物の確認
スケジュールの確認

グループ分け
道具の配布

今日の目標を発表
グループごとに役割を確認
作業

参加者が楽しめるゲーム等の
レクリエーションの運営



当日

08:00

09:00

09:10

～11:00

～12:00

まとめ

指導者の感想

親子でビオトープを整備するこ
とで、ビオトープ自体がきれい
になるのはもちろんのこと、こ
どもが普段どのようにビオトー
プで活動しているか、親も興味
をもち、親子の楽しいコミュニ
ケーションの場になっていた

参加者の感想

普段、親子で自然に触れる機会
があまりないので良い経験に
なった学校の活動に参加するこ
とで、学校や地域に対する関心
が起きた

まとめ

地域と子ども、保護者が一体と
なって、学校ビオトープに整備
や観察を行うことで、地域、学
校に対する関心が深まりや地域
愛を育むことができた

山で自然を観察しつつ、環境も整備。地域と協同して小さな活動を大きな成果に

全校・地域協同で推進するエコ・スクールプロジェクト

学校の近くにある猪子山をフィールドとして自然観察などを行う「猪子山活動」や、エコ・スクール委員が中心となってごみ削減・節水・節電に取り組む「エコ・スクール活動」など、複数の活動を地域とも協同しながら行っている。

- ・活動年数/平成15年より9年目
- ・活動地域/滋賀県東近江市町猪子町近辺、校内
- ・連携/エコ・スクール支援委員会、八日市南高校
- ・第17回コカ・コーラ環境教育賞 活動表彰部門 優秀賞受賞



こどもたちの活動一つ一つは小さい。コーディネートすることで、個々の活動が一つにつながっていく。

2003

エコ・スクールの
取り組み開始

活動内容は大人が決めるのではなく、こども側からエコ・スクール支援委員会へ提案され、話し合いで決定される。

学校の活動支援のために、保護者や地元の支援者によって「エコ・スクール支援委員会」が結成された。これまでに雨水タンクや水車などを支援して頂いている。

滋賀県による
エコ・スクール認定

「猪子山活動」「エコ・スクール活動」「森林再生プロジェクト」など個々の活動を上手くコーディネートし、地域を巻き込んだエコ・スクールプロジェクトという大きな枠組みを作った。

1992以前

猪子山をフィールドとした活動

以前は猪子山をフィールドとして利用していたが、個々の活動につながりがなかった。

エコ・スクール活動

高学年がエコ・スクール委員会となって、学校の無駄を減らす活動に児童主体で取り組む。水グループ・電気グループ・ごみグループに分かれ、節水・節電・ごみの減量に取り組んでいる。



こどもたちの節電意識が高くなりすぎて、逆に教室が暗く感じる時も・・・。

猪子山活動

学校近くの猪子山をフィールドとして、自然に親しんだり調査を行ったりする。

こどもたちが伐採した竹を竹垣にすることで、山を手入れしつつ遊歩道整備も兼ねている。

地元の高校生に教えてもらいながら竹垣作り!ちゃんと結べたかな?



森林再生プロジェクト

地元自治体やまちづくり協議会、地元の高校と協同で活動していく。放置されていた猪子山に人の手を加えることで、里山として再生させる取り組み。

2011現在

2010

先生

保護者

こども

地域の人たち

第17回コカ・コーラ環境教育賞
活動表彰部門 優秀賞受賞

水環境を調査する。上流から下流への変化やその原因を調べる。山・川・湖を対象とすることで、“土につなげる活動”を目指す。

伊庭内湖の調査活動



山路川の水質調査



山路川の調査。どんな生き物がいるかな?

準備

事前に把握しておくべき項目

- ・竹垣の作成個所と分担を確認する
- ・棕櫚縄の結び方を確認する
- ・バケツに水を張り、
棕櫚縄を濡らしておく
（縄が乾いた時に堅く締まるため）
- ・竹垣を作る場所の下準備をしておく

参加人数

児童：約120人（5年生全員）
指導者：約20人
（高校生・先生
・役場職員の方）

準備する物

児童：ジャージ、はさみ
指導者：伐採した竹、木槌、
竹を結ぶ棕櫚縄、
水を張ったバケツ、はさみ

参加者の流れ

校庭に集合、猪子山へ移動

猪子山到着、説明を受ける

竹垣作り

学校へ戻る

指導者の流れ

猪子山に集合、準備開始

開始式、活動内容説明

竹垣作り・紐の結び方指導

後片付け

終了式、まとめの話

当日

13:20～
13:40

13:40～
13:50

13:50～
14:30

14:30～
14:40

14:40～
14:50

まとめ

当日の成果

時間内に縄を結べなかったこどももいたようだが、竹垣を作ることが出来た。
公園としての整備の一步となれば。

指導者の感想

短い時間だったが、高校生と一緒に活動することで山を大切に
する気持ちを学んで欲しい。

今後の活動

ドングリの植林や下草刈りなど、
猪子山に手を入れる活動を行っていく。
将来的には地域の古墳公園・墓地公園としての整備に関する活動とも協働していく。

「クメジマボタルを蘇らせる」その想いを胸に

ホタルを里山再生のシンボルに掲げ取り組む環境保全活動

自然共生型の里地里山を再生するシンボルとして、ホタルを掲げ、久米島の豊かで多様な生態系と自然環境の保護・保全に関わる。ホタルをとおして自然を慈しむ感性や自然科学への関心を育むことを目的とし、人々の営む生活環境の改善が、森や川、海の環境の改善へとつながり、地域の人を結び、ひいてはこどもたちの心を育む活動になると考え様々な活動に取り組んでいる。

- ・活動年数/約17年
- ・活動地域/久米島の森林、河川、里地里山、干潟、サンゴ礁
- ・連携/グローバルスポーツ医学研究所 他
- ・第17回コカ・コーラ環境教育賞 活動表彰部門 優秀賞受賞

今後の展望

当初の目的であった久米島ホタル館を中心としたホタルの里づくりを本格的に行い、自然保護や生態系の保全に関わる観察会や調査などを、島の内外に協力を求めながらこれからも活動していこうと考えています。



2011現在

2010

2009

2007

2003

2000

1993

第17回コカ・コーラ環境教育賞
活動表彰部門 優秀賞受賞

こどもホタルレンジャー
環境大臣賞受賞

念願の 全国ホタル大会を久米島で開催

赤土流出対策からの話

一度に完全に流出を止めるのではなく、改善に向かうことの出来るレベルまで抑えればよい。一つの段階が達成できれば、更に次の段階へと進めていく。

どんな環境活動も、急激に行うのではなく、
段階を追って進めていけば成功しやすい。

「ホタルを蘇らせる」というこの目的を実現させる事で、人々が久米島で誇りと喜びを持って生きる意義を見出すことをこの会の活動理念として掲げ、会の名称を「久米島ホタルの会」と改める。



人がどんどん集まるようになり、活動の幅が広がり始める！

ホタルレンジャー
結成

久米島
ホタル館開館

始まり

当時小学校の先生を中心に土地改良事業の尽力者であった人、役場職員数人が集まって、クメジマボタルの棲むことが出来る自然を保護・保全することを目的に「クメジマボタルの会」が結成された。

その後、会のメンバーの1人が、愛知県西尾市での「ホタルの里づくり」の取り組みを視察、これが本格的な活動開始のきっかけに。



『幼い頃何気なく見ていた「ホタル」を昔のようにたくさん蘇らせたい…』



準備

事前準備で把握すべき項目
終了しておくべき項目

- 1 参加者の情報把握と、活動場所の危機意識に基づく自然の危険箇所などの状況把握（それに基づいて当日の計画を立てる）。緊急時連絡搬送対応、緊急時関係機関への連絡体制など。
- 2 当日および前日までの天候、荒天、自然事変、事件事故、交通その他事情による計画変更・中止・延期などの事前打ち合わせ、連絡体制など。

- 3 万が一のための、一時避難場所、避難ルート、搬送病院、警察・消防・海上保安庁などの連絡ルートや場所、移動に要する所要時間等の把握と役割分担と安全体制。
- 4 参加者への危険に関する注意、マナーやルール遵守確認の徹底。
- 5 活動の目的・内容、持ち物・服装、指導体制、指導責任と保険などについて参加者および保護者、代表者、責任者への事前説明。
- 6 参加者およびスタッフへの事前のトレーニング、研修、学習など。

準備する物

参加者：汚れてもよい服、靴、着替え、筆記用具等
指導者：イベントごとの機材（ライト・網）・説明用のパネル・テキスト・地図・スライド等

参加者の流れ

09:00～09:30 集合
受付名簿に記入

09:30～11:30
生き物調査・自然観察会へ参加する

12:00～13:00 昼食&休息
午前だけの参加者は、ここで解散
午後の参加者は、休息
途中参加者も受け付ける

水辺の生きもの調査・自然観察会参加

午後だけの参加者は、ここで解散
夜の参加者は休息
途中参加者も受け付ける

夜の生きものとホテル観察会

20:40 解散



午前：ラムサール条約登録湿地の「久米島の溪流・湿地」までの散策ルートを、調査を兼ねながら歩いて自然観察エコツアー
午後：ホテル館の川と湿地の生きもの調査、自然観察イベント
夕方から夜：ホテル観察と夜の生きもの観察ツアー（調査を兼ねたイベント）

指導者の流れ

当日

08:15 集合：久米島ホテル館

08:30～09:30 ホテル館開館準備、打ち合わせ
メンテナンス、イベント準備、参加者受付

09:30～11:30 ホテル館から
ラムサール条約湿地までのルート
生き物調査・自然観察会

11:30～13:30 片付け、昼食、準備（打ち合わせ）

13:30～15:30 ホテル館周辺
水辺の生きもの調査・自然観察会

15:30～18:30 片付け、夕食、準備（打ち合わせ）

18:30～20:30 ホテル館周辺
夜の生きものとホテル観察会

20:30～21:00 片付け、反省会

指導者の行動をもっと効果的にするには？
スタッフサイドの事前準備の打ち合わせと、可能な限りのシミュレーションを行い、現場の様々な状況に対応できるような想定作業を心がける。

それぞれの時間帯に異なるポイントがある

（参加者は必ずしも全コンテンツに参加しなくてもよい）
午前：ホテル館からの活動でも行う内容であり、森の生物観察にて、データを取ることを通じて発見の喜びを知る。
午後：暑い時間帯であるため、リバーウォッチングにより、気分を一新。特に網が必要。
夕方から夜：日中と違い、懐中電灯で見える範囲で楽しむ。昼間活発な生物は夜の寝ている姿を、昼間隠れている夜行性の生物は夜の活発に動く様子を観察できる。

まとめ

参加者が学校のこどもの場合

感想文を書いたり、この観察体験を壁新聞などにまとめたりする。

参加者が個人の場合

自由研究の題材となる。中には標本づくりのもととなることも。（自由研究にも活かせる資料の用意がある）

その他

研究発表に用いられることもあり、その場合は電話での質問を後日受け付けるなどの対応をする。
参加団体によっては、会報誌への掲載となることもある。

指導者の感想

生物観察から、民俗的な知識にもつながるような指導の仕方が良い環境教育であると思う。
（例）地域特有の生物の俗称や方言を絡める。

地域の環境。パトロールなどを通して、国内に留まらず広い範囲に情報発信と意識啓発を行う

「泳げる中海」を取り戻すため地域住民と一体となって水質浄化・水質保全活動を行う

彦名地区チビツ子環境パトロール隊は地域を中心に環境保全活動や情報発信・意識啓発を行っている。主な活動に、環境パトロールや廃バンストを使用しての台所排水の浄化活動を通して中海の水質保全、廃油キャンドルづくり、割り箸を回収し紙を再生するなどの資源再利用を行っている。

- ・活動年数/約22年
- ・活動地域/鳥取県米子市彦名地区周辺
- ・連携/鳥取県、米子市、彦名町(環境政策課)
- ・第16回コカ・コーラ環境教育賞 活動表彰部門 優秀賞受賞

4R運動の実践

- Refuse(抑制)**: 将来ゴミになるものは「いらない」と断り、元から絶つ。
- Reduce(削減)**: みんなでゴミになるものは、買う量・使う量を減らす。
- Reuse(再利用)**: ものをすぐ捨てず、使えるものは、何回でもくり返し使う。
- Recycle(再資源)**: 不要になったものは、できるだけ、再資源化し、ゴミの量を減らす。



こどもたち手作りの壁新聞。彦名地区チビツ子パトロール隊での活動内容をまとめ、年に1回発行する。



BDF (バイオディーゼル燃料) 事業スタート

「もみの木園」・「吾亦紅」障がい者施設で廃食油再生燃料化装置を導入し、廃食油から「バイオディーゼル燃料(BDF)」を製造する事業に取り組む。



廃油石けんをはじめ現在では廃油キャンドルを製作し、キャンドルナイトを実施している。(キャンドルナイト…夏至、冬至のときをメインに行われる。家庭の電気を消して廃油キャンドルに火を灯す。家族のみんなと集まって家庭でやる場合もあれば、地域の人々と集まって公民館などで環境について話し合うこともある。)



彦名町の公民館前に設置されたわりばし回収箱。今では地元の皆生温泉、県内の学校や企業、飲食店、行政まで回収の輪が広がっている。

彦名地区チビツ子環境パトロール隊 立ち上げ秘話

当時製紙工場に勤務されていた向井さんは、地元のこどもたちと共に「彦名地区チビツ子環境パトロール隊」を結成し、自然や生活環境を学習する機会をもった。そのとき、こどもたちに言われた言葉が向井さんの胸に突き刺さった。「紙をつくる会社は自然環境破壊をしている。大切な木を切って紙をつくるから。」事実、つくられる紙の60%強は古紙から再生されたもので、間伐材の利用が35%弱、新材からつくられる紙は僅か5%。「この言葉は製紙工場に勤める私にとって厳しい言葉でし

たね。」と向井さんは語る。この言葉に大きなショックを受けた向井さんは身近な割り箸に着目し、こどもたちに割り箸が間伐材からつくられていることを説明する。そして手作り新聞の発行を開始し、後に勤務先の工場長の理解を得てこどもたちと共に回収した割り箸から紙をつくるという活動を始める。

※代表の向井さんは、「1988年 郷土提言論文」に応募し、中海を基軸にした環境改善活動論言で鳥取県知事賞を受賞する。

廃食油回収スタート

廃食油の回収呼びかけポスターを作成、町内の各家庭、旅館、飲食店から廃テンブラ油を集める。



パトロール隊立ち上げ

「こどももおとなも身近な環境問題を五感で感じる事が課題解決へつながる近道」との発想から結成。



『出して処理する苦勞より出さない努力を!』

環境新聞「中海」発行開始

再生紙を利用し1回/月発行。鳥取県環境立県推進事業の補助金の一部を活用し、町内1,200世帯全戸配布。



廃油ローソクづくりに必要な材料
廃食油・粉末油脂・香料
・和紙でつくったコヨリ・クリップ



割り箸3膳(約12g)
↓(※割り箸1膳=約4g)
A4のコピー用紙1枚、
または葉書き1枚に再生

割り箸2,500膳
(約10kg)
↓
ティッシュボックス
15箱に再生

準備



ワークシート作成

町内の道路や小川、中海の海岸、側溝などの空き缶・空きビン、タバコの吸い殻などが落ちていないかなど20の環境チェック項目について1項目5点、100満点でチェック。



参加人数

保護者・こどもたち合わせて15人ほど。
回るルートは事前に決まっている。保護者も一緒に歩く。

準備する物

こどもたち:筆記用具、軍手
指導者:ワークシート、
バインダー、ゴミ袋、トンブ



打ち合わせ時期

3月(年度終わり)に年間を通してのプログラム反省、4月(年度初め)に反省を踏まえて話し合いを行い、1年間の活動計画を立てる。(参加者:代表・副代表・サポーター・保護者代表)
参加者へのアナウンス
1年間のスケジュール(打ち合わせで決定したもの)を4月(年度初め)に参加者へお知らせする。(決まっていな
いものについては予定のみ、日付の記入はなし。)
また毎月活動スケジュールをお知らせする。(夏休みは活動も頻繁になるためアナウンスの頻度も多くなる。)
アナウンス方法
メール、FAX(どちらの手段もない場合は直接電話で行う。)

参加者の流れ

指導者の流れ

当日

まとめ

参加者に与えた影響
当日の成果

住んでいる地域を自分の目で見て新しい発見があった。(コンビニの周辺にはゴミが多い、タバコのポイ捨てが多いなど。)環境パトロールをするごとにゴミの収集量が減ってきており、ゴミの減量に繋がっている。環境パトロール活動の結果は年に1回、活動の一環として壁新聞にまとめ、日本環境協会に応募している。また毎月発行する環境新聞「中海」にも掲載される。

指導者の感想

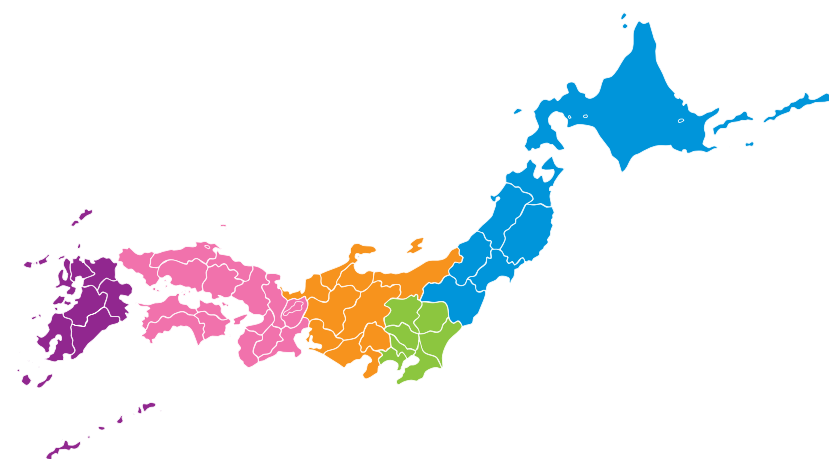
彦名地区チビツ子環境パトロール隊活動報告会において、環境パトロール隊のこどもたちが「環境パトロール中にはタバコのポイ捨てが多かった。シガレットケースを持ち歩いて欲しい。」という意見を言って、そこでタバコを吸いながら報告会に参加していた保護者が慌ててタバコの火を消したのが非常に印象的であった。

08:00～	ワークシート(チェックシート)を人数分用意する。 ・参加者が自宅から持参する用具を忘れた場合の予備の準備(ゴミ拾い用のトンブ、軍手、ビニール袋など)	
09:00	・パトロール後に意見や結果を共有するため、集合場所、昼食場所である公民館のホワイトボードに、質問事項を先に書いておく。(環境パトロール後に感じたこと、意見・良かった点・悪かった点・その他ワークシート採点結果欄など)	
09:00～	参加者集合	指定場所に集合
09:30	点呼、パトロールについてのルール説明など(ワークシートへの記入方法、また参加者へ必要物の配布等。)	パトロールについての説明を聞く。
09:30～	環境パトロール開始	環境パトロール開始
12:00		
12:00～	環境パトロール活動終了	環境パトロール活動終了
13:00	昼食、結果発表 ・意見の出し合い(パトロールをしてみて気付いた(良い点・悪い点) ・参加者全体でパトロールで集めたゴミをまとめる(可燃・不燃・発泡に分別後、計量する)作業	昼食、結果発表 ・意見の出し合い(パトロールをしてみて気付いた(良い点・悪い点) ・参加者全体でパトロールで集めたゴミをまとめる(可燃・不燃・発泡に分別後、計量する)作業
13:00	解散	解散

地域別 歴代受賞団体紹介

第1回から第18回までの環境教育賞の受賞団体は、すでに164団体にものぼります。ここでは今回、「特別インタビュー」「活動団体の歩み」で紹介することが出来なかった歴代の受賞団体も含め、全ての団体を紹介します。活動内容や地域も様々なこれらの団体の中に、きっと次の環境教育のヒントが隠されているはずです。

データは全てコカ・コーラ環境教育賞応募当時のものです。団体によっては必ずしも現在この通りでない場合があります。ご了承ください。



北海道・東北

関東

中部

近畿・中国・四国

九州・沖縄

P79

P82

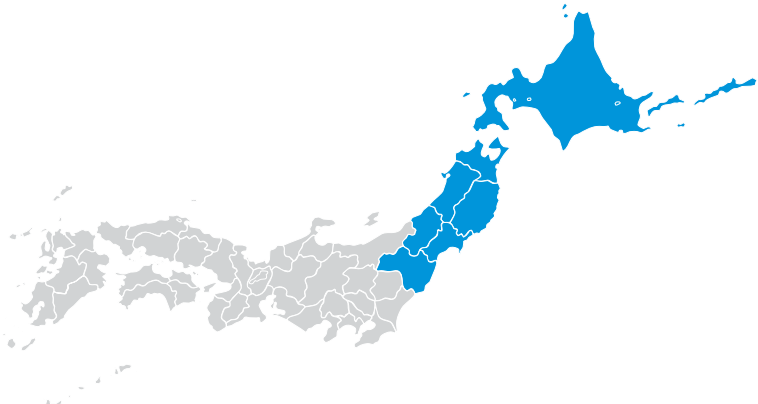
P87

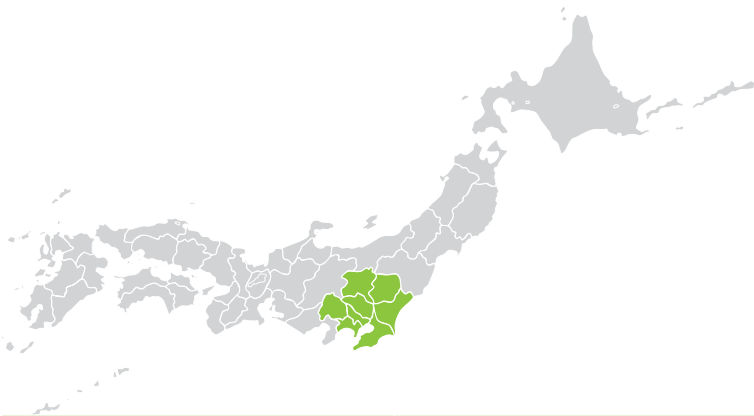
P90

P94



団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
白銀南公民館協力会 「ホタルの里づくり」推進委員会	第9回コカ・コーラ環境教育賞受賞	青森県	大館 恒夫氏	生物飼育・ 保護活動など
地元の勘助川にホタルを呼び戻すため、小・中学生と連携してホタルの幼虫の飼育や放流に取り組むほか、「ホタルの里まつり」を開催し、地域を挙げて「ホタルの里づくり」に取り組んでいる。				
羽幌町「寺子屋塾」	第10回コカ・コーラ環境教育賞受賞	北海道	室田 憲作氏	自然体験、 農業体験活動など
田植え体験や野菜作り、地引網、キャンプ、里山探検など様々な自然体験学習を通して、多感な少年時代に貴重な体験、素晴らしい感動を得ることを目的としている。アドバイザーとして様々な職業の定年者が活動に参加するほか、中・高生のサブアドバイザー、高齢者との交流を図るなど、地域の世代間交流の一翼を担っている。				
山形村日野沢森林愛護少年団	第10回コカ・コーラ環境教育賞受賞	岩手県	澤口 拓哉氏	生物飼育・保護、 美化活動など
全校生徒14名の小規模校で清流を棲みかとするハナカジカの育成や河川周辺の環境美化活動に取り組む。全国でもあまり例のない保護活動のため、水温管理や稚魚の餌の選定などに試行錯誤を重ねたものの、現在、一連の活動は順調で、地域の不法投棄物の撤去のきっかけになるなど地域への波及効果は高く、県内でも知られる活動になっている。				
只見の自然に学ぶ会	第10回コカ・コーラ環境教育賞受賞	福島県	新国 勇氏	自然観察、 自然保護活動など
青少年を対象とする野鳥観察会や水鳥観察会のほか、ブナ自然林の保護活動や水辺林保全活動に取り組む。また、ブナ林研究の第一人者、河野京大名誉教授とともに会津のブナ林の世界遺産登録をめざし、行政と連携した環境保全活動を実施している。				
北海道伊達高等養護学校	第11回コカ・コーラ環境教育賞受賞	北海道	塩見 啓一氏	環境学習、生物飼育・ 保護活動など
高等部単置の知的養護学校において、生き物に対する興味、命の尊さについて学ぶためにビオトープをを造り、生徒の手でホタルの飼育活動に取り組んで9年になる。ホタルの飼育、鑑賞会の実施により市内小学校・中学校との連携や地域住民とのふれあいがもたれ、教育活動の情報発信の場となっている。				
盛岡市立下橋中学校	第11回コカ・コーラ環境教育賞受賞	岩手県	三浦 晃氏	自然保護、 リサイクル活動など
生徒会のエコ委員会が中心となって、全校で、ゴミの分別、節電、節水、砂漠の緑地化を進める環境保護団体「緑のサヘル」への募金など、リサイクル、環境保護活動に取り組んでいる。また毎年環境問題をテーマにしたシンポジウムを開催している。				
秋田県美郷町立六郷中学校	第12回コカ・コーラ環境教育賞受賞	秋田県	渡邊 義實氏	生物飼育・保護、環境調 査、福祉学習活動など
絶滅の危険性が最も高い魚、イバラトミヨが以前のように、全国名水百選の里六郷に生息できなくなっていることから、六郷清水の生態・環境を調査し、イバラトミヨの増殖および放流を行っている。また、地域を巻き込み、アルミ缶を回収・換金して車椅子を購入し、特別養護老人ホームに寄贈するなど、環境学習だけでなく福祉の学習も積極的に行っている。				
宮城県気仙沼市立面瀬小学校	第13回コカ・コーラ環境教育賞受賞	宮城県	山崎 昭氏	自然観察、 自然保護活動など
水辺環境をフィールドに環境教育を実践。地域住民をはじめ、行政、大学や専門機関など19団体からなる「プロジェクト連携推進委員会」を設置し、子供達の活動を支援している。こうした活動が評価され、昨年、国連大学が提唱する「環境教育の拠点」の世界7ヵ所の1つとして気仙沼市が選出され、同校の取り組みが世界中に情報発信された。				
知床自然愛護少年団	第14回コカ・コーラ環境教育賞受賞	北海道	横内 正元氏	自然観察、 自然保護活動など
世界自然遺産・知床の自然を学び、親しむことによって子供たちの心身を鍛え、知床の自然愛護と郷土愛を育てることを目的に活動している。豊かな環境での自然観察会、キャンプや植樹祭への参加、海岸の清掃活動など、四季を通して野外活動を行っている。なお、現在の団長は、36年前の設立時の団員が務めている。				
利府町みどりの少年団	第14回コカ・コーラ環境教育賞受賞	宮城県	庄司 浩氏	自然保護活動など
県民の森を活動拠点に、小学校2校から自主参加で編成された少年団として、学習会や植林活動といった"学習活動"、地域の環境活動に積極的に参加する"奉仕活動"、そして楽しい"レクリエーション活動"の3つの活動を柱に次世代を担う子供たちを育成。昨年結成30周年を記念してソメイヨシノ150本を植樹。中学生OBも積極的に活動に参加している。				
北海道標茶高等学校	第15回コカ・コーラ環境教育賞受賞	北海道	小川 龍幸氏	自然保護活動など
失われつつある釧路湿原の豊かな自然を、次世代に引き継ぐことを目的とした保護・再生プロジェクト。湿原に自生する水生生物の水質浄化能力を活用するため、水質浄化実験のみならず、湿原再生ハウスやパイオ温室での植物育成などの取り組みを行っている。これらの活動を多くの人に伝えるため、環境教育に関する研究会や講演会を積極的に開催している。				

				
団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
西澤信雄氏	第1回コカ・コーラ環境教育賞受賞	山形県	西澤 信雄氏	自然観察など
朝日ナチュラリストクラブを結成し、月1回、自然体験を中心とするさまざまな活動を行っている。二泊三日の夏のキャンプでは、朝日川でカヌーに乗りたり川泳ぎを行う。また、「ブナの木めぐり」と称して、身近なブナの森を訪ねたり、地域の風景遺産の良さを見直すことに努め、日本初のエコミュージアムの実現を目標としている。				
秋田・自然を守る少年団	第1回コカ・コーラ環境教育賞受賞	秋田県	鎌田 孝一氏	自然観察、 自然保護活動など
20年以上にわたって植物観察会やクリーンアップ活動を行い、子どもたちに自然保護や環境保全の精神を啓蒙している。ブナの実生調査では特に精力的な活動が続けており、ブナ林12ヘクタールの岳岱でブナの木の実生や灌木の種類、小沢の水棲生物、昆虫や鳥類等を調査。子どもたちの目の前で観た自然の記録図の作成を計画している。				
釧路市立柏木小学校	第2回コカ・コーラ環境教育賞受賞	北海道	土田 頼子氏	自然観察、生物飼育・ 保護活動など
通学路沿道のコスモス街道づくり、春採湖畔や周遊路での動植物の観察・マップ作り、バードテーブルでの野鳥への給餌など、子どもたちが主体性をもって活動に取り組んでいる。地域での啓発活動として、環境問題に関する情報提供を行ったり、主に春採湖を学習素材とした総合学習の促進を図るなど、環境教育の広がりも着実に見られる。				
自然愛好グループ ヨシキリの会	第4回コカ・コーラ環境教育賞受賞	北海道	伴野 俊夫氏	自然観察活動など
毎月開催する幌別川の野鳥定点観察やサケの採卵体験、野の花に親しんだりネイチャーゲームを実施したりと、四季の変化を体験する事をテーマにした実践的な環境教育活動を行っている。活動に参加する子どもたちの組織化、初心者向けのバードウォッチングや講演会、野鳥図鑑の発行など計画している。				
気仙沼自然塾 グリーンメイツ	第5回コカ・コーラ環境教育賞受賞	宮城県	谷山 友夫氏	自然観察活動など
年齢や経験を考慮して参加者を3段階に分けたり、活動の質、密度を保つために定員制を採用している。自然保護や環境問題の知識を持つ人材育成を目的とする活動は、植物、昆虫、海辺の生物の野外観察、地質・化石のフィールド調査や基礎的な科学実験など多岐にわたっている。				
出羽三山の自然を守る会 自然教室	第5回コカ・コーラ環境教育賞受賞	山形県	長南 厚氏	自然観察、 農業体験活動など
年に8～10回の登山や自然観察・調査、畑づくり、キャンプなどの活動が20年にも及ぶ。子どもの頃から身近な自然と触れ合うことで、自然を大切にし、主体的に行動できる人間育成を図っている。(財)日本自然保護協会と共催で講習会を開催。青年を対象とする指導員養成にも注力している。				
山元町こどもエコクラブ はっぱあず	第6回コカ・コーラ環境教育賞受賞	宮城県	新沼 寿恵氏	自然観察など
自然観察、脱穀後のワラを使ったしめ縄づくりのほか、民話や伝承などの聞き取り調査を実施し、活動内容を紙芝居や1分間スピーチにまとめ発表。「環境に関心を持ったことを表現する」情操教育にも重点をおいた活動を行っている。				
士幌なまくら会	第9回コカ・コーラ環境教育賞受賞	北海道	山下 征夫氏	自然観察活動など
ふるさとの良さを再発見することを目的に野外活動を推進。自然体験活動を提供する場「少年アウトドアスクール」の開設のほか、「自然観察ガイド」の製作、指導者の育成など環境教育に積極的に取り組んでいる。				



関東

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
井の頭・神田川を守る会	第1回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	糸井 守氏	自然観察、自然保護活動など
井の頭公園・神田川周辺の自然植物園の観察会や親水イベント、清掃活動等を実施。都市部での開発に際して親水護岸化を推進し、地域住民の幅広い参加を得て緑化保全や青少年の育成に取り組んでいる。神田川に憩いの親水テラスが新しく造られることに伴い、より実践的な動植物観察や水辺での環境教育活動を計画中。				
稲城の自然と子どもを守る会	第2回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	中沢 丈夫氏	自然観察、生物飼育・保護活動など
野鳥観察や植物観察、ホタルの観察、タケノコ掘りや焼き芋づくり、落ち葉かきやカブトムシの堆肥場づくりなど、自然との触れ合いを大切に、子どもたちが四季を通じて楽しみながら多彩な活動を展開。年6回のペースで会報も発行してる。市民参加による大気測定や水質調査など行政とともに協調して確実に成果を上げている。				
リスの会	第2回コカ・コーラ環境教育賞受賞	千葉県	石山 啓二郎氏	生物飼育・保護活動など
リスを保護・育成し、人間とリスが共存できる公園作りを目指している。市民観察会やリスの生態調査・研究などの活動には、地域の子どもたちやPTAも積極的に参加し、他の地域の公園づくりにも影響を与えている。動物を対象とした都会の中での環境教育として、全国的な交流もうまれており、活動記録の出版も計画している。				
鎌倉の川びらきの会	第2回コカ・コーラ環境教育賞受賞	神奈川県	藤井 経三郎氏	自然保護活動など
鎌倉の川を子どもたちと親しむ事により、山と川と海の関係、水の循環、都市と自然と環境などを学び、環境を配慮した暮らしへの意識を啓蒙している。独自のシンボルマークをつくるなど、遊び感覚で子どもたちに環境に対する理解を促す創造的な活動は近隣の市民活動グループとの交流を生み、流域ネットワークへと広がっている。				
東久留米市・ホタルを呼び戻す会	第3回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	菅谷 輝美氏	生物飼育・保護活動、自然保護活動など
ホタルが生息できる、都市部を清らかに流れる湧水の川を明日の子どもたちに残すことを目的として活動を展開。流域の小・中・高生や市民を中心に、ホタルの生態観察や水質調査、河川環境の保全などを行っている。また、環境映画の上映会や身近な生き物の調査・観察、川遊びなどを行い、子どもたちが環境に対して興味をもつよう努めている。				
自然文化誌研究会	第3回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	高木 文雄氏	自然観察、生活体験など
子どもから大人までを対象とした野外活動や、埼玉県大滝村につくった農山村エコミュージアムでの体験型キャンプなど、実践的な環境教育活動を展開。大滝村では地元の協力者も年々増えており、地域活性にも貢献している。多くの環境教育のモデル地域として発展させていくことを目指している。				
こども自然クラブ	第4回コカ・コーラ環境教育賞受賞	埼玉県	西尾 三枝子氏	自然観察、生物飼育・保護活動など
子どもたち自身の提案によって活動プログラムが組まれる。活動は地元の見沼田んぼでの観察・調査、トンボ池作り、生き物の巣作り、無農薬米作り専門家を招いての野鳥・植物・昆虫の観察などバラエティーに富み、特に生態系の理解を促す事を目的としている。活動を通じて子どもたちが発見した遊びや知識を冊子にまとめる予定。				
立川キッズ	第4回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	本郷 潤氏	自然観察活動など
「森で遊ぼう、絵を描こう」をテーマとし、幼児～小学生を対象とする五感をつかったネイチャーゲームや、その体験を絵に表現するアートワークショップが活動の中心。都会の人工的につくられた小さな自然の中での実体験を通じて、子どもたちの想像性、創造性、自主性など育むことを目的としている。				

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
仙台市立八木山南小学校	第15回コカ・コーラ環境教育賞受賞	宮城県	飯坂 新氏	環境調、環境学習活動など
学校裏手に広がる林「学びの森」を舞台に、31年前から環境や自然に触れる学習を実施。学年ごとにオリエンテーリングや森に住む生き物調査、間伐作業などに取り組んでいる。1年生から6年生まで計画的にプログラムが生まれ、入学から卒業まで一貫した環境体験学習が行われている。				
仙台市立北六番丁小学校	第15回コカ・コーラ環境教育賞受賞	宮城県	臼井 泰雄氏	環境調査活動など
平成14年度から川を題材にした環境教育を行っていたが、平成16年度に「エネルギー教育実践校」に選定されたことをきっかけに、全校でエネルギー環境教育に取り組む。地元の大学や企業と連携しながら、環境や地球温暖化をテーマにした継続的な観察調査活動を行っている。				
こどもエコクラブくしろ	第16回コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」優秀賞受賞	北海道	長谷川 隆朗氏	釧路市自然化環境保全基礎調査
釧路湿原国立公園にゴミ拾い、釧路湿原に生息する野生生物の観察調査、特定外来生物の観察・調査、駆除活動など共に、異年齢の壁を越えた環境教育実践型学習活動の実施。				
栗山町ハサンベツ里山計画実行委員会	第16回コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」優秀賞受賞	北海道	中井 惺氏	里山を核とした夕張川流域における自然環境体験学習
里山づくりの中で体験田畑復元、トンボ池、湿地植物による水質浄化試験の実施、玉石敷設による魚道づくりを行う。また稲作農業体験や林業体験、川体験を通じ、自然環境体験学習に広がりを持たせる活動を提供。				
置農MOTTAINAIプロジェクトチーム	第16回コカ・コーラ環境教育賞受賞「次世代支援部門」大賞受賞	山形県	寒河江 豊氏	資源循環型農業の創出と地域生物資源循環システムの構築活動
ワインの搾りかすを家畜のエサにリサイクルする取り組みによって、地域産業廃棄物の減量化に挑みながら、製造したリサイクル飼料を畜産農家に供給。				
北海道岩見沢農業高等学校 農業土木工学科	第17回コカ・コーラ環境教育賞「次世代支援部門」優秀賞受賞	北海道	土田 純也氏	雪冷熱や地中熱などの新エネルギーを体感できる施設を施行・運用する
10年を取り組んでいる「雪冷熱利用」と「地中熱利用」などの農業利用についての成果を生かし、①新エネルギーに出会い②体感し③共に学ぶことのできる、学習施設を常設の施設として設置・運用する。雪山からの雪冷熱と地中からの地熱をハウスに導入し、ハウス内で効果を体感できる施設であり、新エネルギーを体感することで、学習効果を高めることを目的とする。				
秋田県潟上市立大久保小学校	第17回コカ・コーラ環境教育賞受賞「活動表彰部門」優秀賞受賞	秋田県	橋本 恵子氏	「草木谷」での農業体験とビオトープによる環境学習
「聖農」とも呼ばれる石川理紀之助ゆかりの「草木谷」の再生事業に参加し、休耕田を再生する活動を行う。また無農薬・無化学肥料での稲作を田植えから脱穀まで行っている。さらに、馬踏川の水質調査を25年間継続して行っている。これらの活動を茨城県の「子どもフォーラム」やコンクールで発表したり、シンボルマークを作成し地元商品に採用されるなど、幅広く情報を発信している。				
リバーネット21ながめま	第18回コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」優秀賞受賞	北海道	杉本 利夫氏	小中学生に水辺環境の重要性、河川環境啓発活動
小中学生を対象に、河川環境啓発活動を実施。長沼町が、過去多くの水害に悩まされてきた背景から、水辺環境の重要性を伝えるために自然体験学習の支援を行っている。河川に関わる関係機関と連携し、河川環境の調査・研究活動にも取り組んでいる。				
NPO法人ビオトープ・イタンキ in 室蘭	第18回コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」優秀賞受賞	北海道	大西 勲氏	「獲物のあるビオトープ」を作ることで、子どもたちの健やかな生長に寄与
2006年からビオトープの達成を進め、今春で達成計画を完了。トンボやミズカマキリやガムシが定着し、ホタル復活も実現。「ビオトープ・イタンキ」は「獲物のあるビオトープ」として、子ども達が自由に採取もできる自然体験の場となっている。水域が充実し、小学生の授業として観察会(トンボ捕りや魚すくい)や自然体験の受け入れも可能になっている。				
青森県立久井農業高等学校 チーム・フローラフォトニクス	第18回コカ・コーラ環境教育賞受賞「次世代支援部門」大賞受賞	青森県	市沢 理奈氏	津波被害を受けたサクラソウ保護と花壇再生
津波被害を受けた絶滅危惧種サクラソウの採種を県と共に実施し、貴重な生物資源として保存。増殖後は株を保存する市民参加型の保護活動につなげる。さらに、塩害を受けた花壇の早期再生のために新しい除塩と土壌改良技術を開発し、花壇や農地の復旧活動に取り組む。				
南部町立久井小学校	第18回コカ・コーラ環境教育賞受賞「活動表彰部門」優秀賞受賞	青森県	高橋 光憲氏	水生生物調査、サケの稚魚放流など、多彩な水環境保全活動に取り組む
多彩な水環境保全活動を実施。水生生物調査、如來堂川クリーン作戦、源流観察、サケの稚魚放流などに取り組んでいる。リサイクルおもちゃ作り、廃油石鹸作りを行う「環境学習」や、全校で緑のカーテン作りを行うなど、多岐にわたる活動を行っている。				

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
特定非営利活動法人 空堀川に清流を取り戻す会	第9回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	小林 寛治氏	環境調査、 美化活動など
汚染が著しい空堀川に清流を戻すべく、地域住民、地元小・中学校が年に2回のクリーン活動を実施。また、調査報告書の発行やシンポジウムの開催など環境・社会教育への活動の場を広げている。				
特定非営利活動法人 自然と遊びの会	第9回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	加々見 良二氏	自然保護、 自然体験活動など
子供たちが地域で生き活きと遊べる環境づくりを目指し、野草園づくり・自然体験・ネイチャーゲーム・ワークショップなどを実施している。特に夏休みには一ヶ月連続で活動し、子供たちの自然体験の場を提供している。市街地の公園の自然回復や「自然塾」の創設などの構想も持つ。				
栃木県立足利養護学校	第10回コカ・コーラ環境教育賞受賞	栃木県	藤田 佐織氏	自然観察、生物飼育・ 保護活動など
病弱養護学校である特質上、隣接病院に入院する児童生徒を外に連れ出そうと、巣箱掛けや野鳥観察を始め、現在では校内にビオトープを造成し、絶滅危惧植物であるミズアオイを栽培するなど活動の幅を広げている。				
宮代 水と緑のネットワーク	第10回コカ・コーラ環境教育賞受賞	埼玉県	島村 忠彦氏	生物飼育・保護、農業 体験活動など
豊かな自然環境の再生をめざして、ホテルの里作り活動やビオトープでのメダカの飼育、「田んぼの学校」活動をはじめとする有機農業などに取り組み、地元の子供たちだけに留まらず、東京の子供たちも参加。また、地域住民に対して環境講座を設けたり、パネラーを招いてシンポジウムを行うなど活動は多岐にわたる。				
東大和市立第七小学校七森クラブ ホテル保存会	第10回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	井上 忠三氏	生物飼育・ 保護活動など
年間を通してクラブ活動でホテルの飼育に取り組むほか、総合学習の授業でも学習題材として取り上げる。毎年開催される鑑賞会は市内外から2000人以上の人が訪れるなど地域イベントとして定着している。また、昨年からホテルの活動を継続的に取り組むために学校・PTA・地域が一丸となって有志と卒業生から成るホテル保存会を発足。				
葉鹿エコクラブ	第11回コカ・コーラ環境教育賞受賞	栃木県	大島 由臣氏	環境調査活動など
学校近くを流れる彦谷川水質調査やEMを使った浄化活動をはじめ、廃油活動での石鹸作り、生ゴミの堆肥化など身近な環境に積極的に取り組んでいる。また、定期的な水質調査や環境調査を通じて自然環境の理解に繋げている。月1回「親子環境学習会」を開催し、活動を地域に広めている。				
喜多見パンボコ会議	第11回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	江崎 美枝子氏	自然体験活動など
「喜多見の良いところを見直してまちづくりに反映させよう」をテーマに、実際に野川に入り生物調査やそこにある食材を使って料理をしたりと自然と触れ合いながら楽しみながら地域の環境資源を見直す活動を行っている。活動の内容は「ぼんぼこ新聞」を通じて分かり易く地域住民に伝えられている。				
小田原市立報徳小学校	第11回コカ・コーラ環境教育賞受賞	神奈川県	篠澤 幹夫氏	活動など
学校、家庭、自治会との連携を図りながら、生ゴミの資源化活動を実施。出来上がった堆肥は校内の畑、地域の家庭菜園等で野菜作りに活用している。また、校内にビオトープ「報徳ランド」を作り環境学習の場とし、学校、地域が一体となり維持管理をしている。				
特定非営利活動法人 アサザ基金	第12回コカ・コーラ環境教育賞受賞	茨城県	飯島 博氏	自然保護活動など
霞ヶ浦と北浦の湖岸植生保全・復元活動「アサザプロジェクト」を実施。また小学校のビオトープ作り・補修管理を行うほか、小中学校への出前授業も実施。さらに雑木林の下草刈りや間伐を行う「1日さこり」体験も開催。その他にも霞ヶ浦や、北浦流域に植えつける水草アサザの苗作りのために、系統保存株の株分けを実施し、約900人が里親になった実績をもつ。				
横浜市立下永谷小学校	第12回コカ・コーラ環境教育賞受賞	神奈川県	加納 多嘉美氏	自然体験・ 環境学習活動など
横浜市の住宅地の中、校庭が子供にとつての自然体験の拠点になるように「校庭自然博物館」として整備し、様々な体験活動に取り組んでいる。学年ごとに環境教育カリキュラムを設定して環境学習を行うほか、地域で実施している「花いっぱい運動」にも参加するなど、地域の自治会、老人会、ボランティア団体などと協働し環境教育を推進している。				

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
高砂エコクラブ	第6回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	福岡 清治郎氏	自然観察・ 環境調査活動など
「地域から見える地球環境」をテーマに、昆虫のあふれる場所づくりを目指して、酸性雨調査、水質調査、自然観察、キャンプ、生ゴミ堆肥化等の活動を展開すると同時に、「ごみたちの主張」という劇を通じて発表を行うなど、活動は多岐にわたってる。				
アースレンジャージュニア	第6回コカ・コーラ環境教育賞受賞	千葉県	石田 芳子氏	自然観察、伝統技能の 体験学習活動など
「自分たちの暮らしや環境に関心をもち、地域や地球の環境を守ることに必要なことを話し合って決め、積極的に参加し実践していくこと」を目的に、酸性雨調査、草木染め体験、星座ウォッチング、ケナフの栽培・紙すきなどの体験学習を、地域の小学生対象に行っている。				
こどもエコクラブPiPi	第7回コカ・コーラ環境教育賞受賞	埼玉県	土田 貴子氏	自然観察活動など
自然観察会、野草摘み、エコビンゴゲームなどの環境体験プログラムを通じて、自然生態系のしくみやその重要性を理解し、環境にやさしい暮らし方を実践。子ども達の環境を大切にす心の育成に努めている。また、毎月1回クラブ新聞「PiPi通信」を発行している。				
ラブリバートリップ大岡川	第7回コカ・コーラ環境教育賞受賞	神奈川県	外山 カオル氏	環境調査活動など
ガールスカウトが中心となり大岡川の水質・湧水調査を行っている。調査・クリーンキャンペーンにあたっては、一般から参加者を募集、調査結果を市の発表会等定期的に発表する等、啓蒙活動を行っている。また、川の調査で気づいたことを「市長への手紙」にするほか、「市長と語る会」に参加し活動成果を発表している。				
茨城県立土浦第二高等学校化学部	第7回コカ・コーラ環境教育賞受賞	茨城県	長谷川 博氏	自然保護、 環境調査活動など
霞ヶ浦に流入する56河川のうち20河川について毎月水質調査を実施している。研究調査結果は、化学クラブ研究会や世界湖沼会議などで発表し、それ等の機会を通して環境保持を日本国内、世界にアピールしている。				
ほたるの里・三鷹村	第8回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	箕輪 一二三氏	生物飼育・保護、 農業体験活動など
ホテルの自然発生を「豊かな自然のシンボル」として、ホテルの生育環境を保護し、毎年、鑑賞会を開催している。また地域の水田を借り受け、「ちびっこ農業体験稲作り」活動など年間を通して、子ども達に農作業体験の場を提供している。				
みずもと自然観察クラブ	第8回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	五十嵐 吉夫氏	自然観察活動など
毎月プログラムを変えて都立水元公園にて親子を対象に自然観察会を開催しており、6月で165回目を迎えている。定例観察会以外にも月に2回の早朝野鳥観察会を行い、機関誌「かいつぶり」も毎月発行している。また、葛飾区に環境保全に関する提言を行うほか、野鳥展やシンポジウムの開催など地域密着型の啓発活動にも取り組んでいる。				
足尾町本山小学校緑の少年団	第8回コカ・コーラ環境教育賞受賞	栃木県	山口 サチ子氏	美化活動など
足尾銅山の煙害や土砂の流出により失われた地域の緑を学校から取り戻そうと、児童達がたい肥、土作りから取り組んでいる。				
川崎市立菅生小学校	第8回コカ・コーラ環境教育賞受賞	神奈川県	矢野 祐三氏	自然観察、 環境調査活動など
地域住民や市民団体と連携し、自然観察会、河川の水質・生物調査、ホテルの飼育など多彩な自然保護活動に取り組んでいる。また、ゴミと環境を考えるをテーマに「キッズサミット」を開催し、子ども達による地域への環境啓発活動にも積極的である。				
阿久津小学校緑の少年団	第9回コカ・コーラ環境教育賞受賞	栃木県	水井 安廣氏	環境調査、 美化活動など
全校生徒を対象に、ごみ問題や樹木に関する調査、鬼怒川のクリーン活動から障害者との交流まで幅広い活動を実践。また、環境に対する思いを絵本にまとめ、地域への啓発活動を展開している。				

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
東海大学チャレンジセンター 環境キャラバン隊	第16回コカ・コーラ環境教育賞 「次世代支援部門」優秀賞受賞	神奈川県	井下原 元氏	環境教室開催や街頭イベントの実施による環境啓発活動
小中学校を対象とし、キャラバンで3都市を巡り環境啓発活動を実施。これらの活動に伴う環境負担の一層の低減を図り併せて教育効果を高める為、移動用のマイクロバスの屋根にソーラーパネルを設置するとともに環境教室で使用する電力を自前で伝達し、より環境にやさしいキャラバンを展開。				

さいたま市立日進小学校	第17回コカ・コーラ環境教育賞 「活動表彰部門」大賞受賞	埼玉県	下條 清氏	保護者や地域の環境ボランティアと連携し、柔軟で継続的な活動を実施
地域の環境ボランティアと共に環境保全活動を行う。ピオトープの整備・維持・管理、野生動物の保護活動、絶滅危惧種のタコノアシやニホンアカガエルの保護・育成、校内の下草刈り・植樹、環境勉強会などを行っている。また、ピオトープの観察や野鳥の観察が容易に出来るようにそれぞれを整備し、木道・木のトンネル・アケビトンネルを設置し、児童が自由に歩き回れるような施設づくりしている。これらの場所は、地域の方の憩いの場・散歩道にもなっている。				

葉鹿エコクラブ	第17回コカ・コーラ環境教育賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	栃木県	大島 由臣氏	地域の川の生物調査や浄化活動を実施
今できることを小学生の時期に実践的に感得させるために、地域において活動を展開している。活動内容は ①彦谷川の浄化活動及び水質調査 ②廃油回収と石鹸作り ③親子環境学習会 ④鮭の放流 ⑤幼稚園と共同して行うシイタケの駒打ち ⑥ブログの作成と実践発表(1年2～3回)による情報発信である。さらに、地域への働きかけで市とも協力し「彦谷川一斉清掃」を実現させている。また、地域団体と協力し河川浄化の看板・ポスターを商店に設置・掲示する活動を毎年行っている。これらの活動により、自主的に自然を調べたり、環境関係学部に進学するものが大勢育っている。また、社会貢献の実感・物を大切に扱う姿勢・自然を愛する気持ち・表現力や対人能力が向上している。当初の活動中心の教師が異動した後の地域活動化が成功している。				

八溝自然たんけんたい	第17回コカ・コーラ環境教育賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	茨城県	宮田 國敬氏	地域の山河での自然体験活動を通じて環境学習を実施
環境保全・自然体験活動を通じて地域の自然を大切にすることの育成を図っている。地域の八溝山にて探鳥会や生物調査を地域の環境団体・子ども会と連携して行っている。またトンボの観察会・日本野鳥の会の行事に参加・八溝山と八溝川のクリーン活動・ボトルキャップの回収にも取り組んでいる。一方、外部講師 による自然保護・環境学習も行っている。さらに、町内の各小学校にてグリーンカーテン運動に取り組み、昨年からは「サシバの住める里山づくり」を地域の人々と協力して取り組んでいる。これらの活動を壁新聞や冊子にまとめて発表している。また月に2～3回のペースで「里山だより」を発行することで情報発信に努めている。				

品川区立第一日野小学校	第17回コカ・コーラ環境教育賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	東京都	酒井 敏男氏	環境「ISO」の取組を中心に各種の環境活動に挑戦している
①全校美化活動 ②「品川版学校ISO」で節電・節水など ③「品川版家庭ISO」で夏休み中のエコ活動 ④アルミ回収 ⑤CO ₂ 削減 ⑥「キッズISO14000プログラム」での節電・節水を行う。また、これらの活動を洞爺湖サミットでの国際テレビ会議の参加、青森県の北斗小学校とのテレビ会議、クウェート国王の妹アムサル妃の来校、アラビア語環境ポスターの贈呈などを行い高い情報発信を行っている。				

牛久市立牛久第三中学校	第18回コカ・コーラ環境教育賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	茨城県	柴山 光氏	牛久沼の調査、再生のための実験の実施
「牛久沼の環境を知ろう」をテーマに、科学的・社会的に調査する方法を体験プログラム化。季節ごとに生き物・植生・水質の調査を実施。牛久沼の環境を改善する方法を探るため、学校のプールをピオトープ化し、牛久沼再生モデル実験を行う。「うしくサイエンス・フェスタ」などで活動内容の発表や環境改善の提案を行っている。				

栃木県立栃木農業高校 地域おこしプロジェクト班	第18回コカ・コーラ環境教育賞 「次世代支援部門」優秀賞受賞	栃木県	金子 颯希氏	環境に優しいヨシ堆肥を考案 足尾銅山の土壌改善に役立てる
水生植物のヨシから堆肥を考案、足尾銅山の土壌改善に役立てる。足尾銅山は鉱毒事件以降環境が悪化したが、遊水地一帯は現在ヨシの湿原となっている。そこで、従来雑草化し廃棄されていたヨシを、堆肥として使用することで、足尾銅山の土壌改善と緑化を図っていく。				

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
NPO法人 印旛野菜いかだの会	第13回コカ・コーラ環境教育賞受賞	千葉県	美島 康男氏	自然観察、自然保護活動など
上水水源として全国ワーストワンと言われる印旛沼の水質浄化のため、「植栽いかだ法」を用いた環境生態工法（バイオエコエンジニアリング）による水環境再生活動を行っている。毎年流域の小学校と連携し、環境学習の場として生き物とのふれあい体験学習を行うほか、他団体と協働で市民参加型の環境フェスティバルを実施し、啓発活動に努めている。				

野島自然観察探見隊	第13回コカ・コーラ環境教育賞受賞	神奈川県	本田 明氏	自然観察、自然保護活動など
「身近な自然を探見」をテーマに、毎月1泊2日の自然観察や体験活動を実施している。横浜の「野島海岸」の清掃ボランティア活動のほか、夏には長野市の過疎化が進む村で廃校になった小学校を利用して、10泊11日の長期キャンプも実施するなど、地域を越えた活動を行っている。宿泊集団生活による環境教育活動を通じて、青少年の社会性や協調性を育てている。				

越谷市立大袋東小学校	第14回コカ・コーラ環境教育賞受賞	埼玉県	九ノ里 幸子氏	自然保護活動など
埼玉県教育委員会から「学民ジョイントプロジェクト推進校」として、民間企業との協働で環境教育を実践。つる性の植物を校舎窓際にはわせて涼しくする「グリーンカーテン活動」や環境学習エコフェスティバルを全校で実施している。その他、学校内ピオトープを維持管理し、総合的な学習の時間で活用している。				

足立グリーンプロジェクト	第14回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	平田 裕之氏	自然体験活動など
長年放置されていた区画整理事業用地を活用し、地域住民が気軽に参加できる環境教育の拠点としてコミュニティガーデンを運営。主なテーマはヒートアイランド対策と地球温暖化対策。ハーブやキウイなどを活用した青少年を対象としたユニークなプログラムを多数実施。またHPを積極的に活用して環境学習プログラムを広く一般に発信している。				

日光市立中宮祠小学校	第15回コカ・コーラ環境教育賞受賞	栃木県	中嶋 典男氏	自然観察、生物飼育・保護活動など
過疎化が進む奥日光で地域の自然の大切さを理解し、それを守っていく人材を育成するため、地域の貴重な自然を知り、伝える活動を展開。地域の主要産業であるヒメマスの地引網漁・採卵活動やモミヤカラマツを鹿の食害から守るための活動を実施するほか、恵まれた自然を再認識し奥日光を訪れる人々にその魅力を伝えるガイド体験を行っている。				

葛飾区立金町小学校	第15回コカ・コーラ環境教育賞受賞	東京都	土屋 以都子氏	自然保護、環境調査活動など
CO ₂ 排出削減による地球温暖化防止を目的として、子どもたちが主体となり「金町エコの林作り」を展開。平成16年度より実施しているピオトープでの生態系調査に加えて、本年度は葛飾区内で2番目の芝生校庭を完成させ、芝生の学習を開始。さらに今年から地域の人々と協働で「グリーンキーププロジェクト」委員会を発足し、地域を巻き込んでの一大プロジェクトへ発展している。				

片瀬少年少女探検隊	第15回コカ・コーラ環境教育賞受賞	神奈川県	犬山 聡彦氏	自然観察、環境調査活動など
自分たちが住む地域の自然に直接触れ合うことで主体的に自然環境について考えられることができるような活動を展開。片瀬地区の小学4年生から6年生が集まり、月1回のペースで里山や江ノ島の自然観察・調査活動やエコを意識したごみの少ない料理作りなどに取り組む。また次世代スタッフ育成のため、探検隊を卒業して中学生・高校生になった子どもたちには、サポートスタッフとして活動に参加している。				

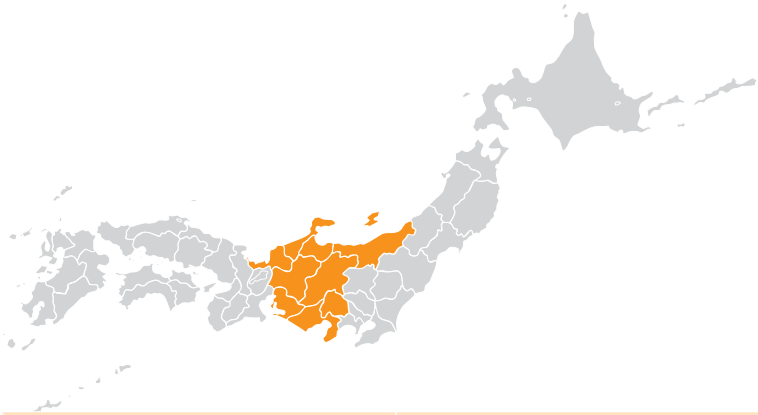
大多喜町立老川小学校	第16回コカ・コーラ環境教育賞 「活動表彰部門」大賞受賞	千葉県	永島 絹代氏	大学・博物館や地域と連携した自然観察会やふるさと探検
大学・博物館や地域と連携した自然観察会やふるさと探検身近な自然を活用した体験学習を実施し、「生き物レッドデータブック」等の冊子制作や発表を行っている。活動を通し、環境保全意識を高める共に表現力やコミュニケーション力も養っている。				

稲敷郡美浦村立大谷小学校	第16回コカ・コーラ環境教育賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	茨城県	桑名 康夫氏	霞ヶ浦の水質・生物・歴史等についての学習
7年間に渡り霞ヶ浦の環境調査を専門機関と連携し、生物・水質・魚類・今と昔の霞ヶ浦の4分野について追及活動を行っている。これまでの経験を活かし「霞ヶ浦の環境調査」プログラムを5年生の総合的な時間に組み込むため、実践研究に努める。				

Group SHAKYS'	第16回コカ・コーラ環境教育賞 「次世代支援部門」優秀賞受賞	東京都	田中 香織氏	ボード型環境教育ゲームの開発
小中学校生を対象とする、電力供給と都市公害に関する環境・エネルギー問題を需要・供給の両面を通じて体感させるボード型の新たなロールプレイングゲーム教材「E-city」を開発。子供たちに環境問題の難しさを体感させ、環境について深く考えるきっかけとなるように普及活動を行う。				

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
丸なす立 夢丸農業小学校	第9回コカ・コーラ環境教育賞受賞	長野県	滝沢 保夫氏	自然保護、 農業体験活動など
地域の小・中学生野球チームが奥信濃特産の丸茄子の栽培、収穫、宅配をし、その収益金で、野球チームを運営するほか、農業被害、土の疲労などを勉強。また、農作業体験を通して、自然の大切さを学ぶとともに、自治体の環境保全活動にも積極的に参加している。				
恵那市立長島小学校	第9回コカ・コーラ環境教育賞受賞	岐阜県	樋田 一成氏	自然保護、生物飼育・ 保護活動など
人・自然に「触れる」「知る」「働きかける」をコンセプトに、「おさしま自然探索」、「ケナフ栽培と活用」、「田んぼづくり」など学年に応じた環境教育を実践。特に学校林学習や永田川をアマコが棲める環境にする活動を通して、特色のある学校づくりを目指している。				
岡崎市立泰梨小学校	第10回コカ・コーラ環境教育賞受賞	愛知県	神尾 心一氏	自然保護活動など
荒れた学校の裏山をササユリが咲き、小鳥が住む里山にしたいという児童の願いから、再生活動に取り組む。地域の老人クラブなどの協力を得ながら、樹木の間伐や下草刈り、炭焼き、シイタケの菌打ちなどのほか、山菜採り、竹の子掘りなど学校行事に様々な野外活動が取り入れられている。				
長野県富士見高等学校 農業クラブ環境保護会	第11回コカ・コーラ環境教育賞受賞	長野県	山田 裕矢氏	自然保護、 美化活動など
地域の水環境の保全、浄化を目的に、手作りの炭焼き窯で作った木炭による浄化槽を設置、水質調査を実施している。地元小学生と共に河川の清掃を行い、また部員が講師となり、小学生を対象に環境学習を行っている。				
小松市立今江小学校5年生	第11回コカ・コーラ環境教育賞受賞	石川県	高島 雅展氏	環境学習活動など
今江小学校は総合的な学習の時間の中で、各学年ごとにテーマを決め環境分野への取り組みを行っている。その中で特に5年生の活動は環境ガイドブックを作成し、校区の各家庭への配布や地球環境保護の大切さを訴える創作劇「輝け！ほくらの地球号」を企画し発表するなど地域の環境啓発に貢献している。				
通船川・栗ノ木川ルネッサンス	第12回コカ・コーラ環境教育賞受賞	新潟県	星島 卓美氏	環境調査活動など
毎年12月、通船川・栗ノ木川の調査・研究・イベントなどの「水辺のシンポジウム」を開催し、市民に情報提供を行うなど、川づくりのモデルとして全国的に評価されている。また、継続的に実施している「子ども環境会議」では、身近な環境学習を実践・発表し、地域コミュニティづくりに貢献。				
大門町立浅井小学校	第12回コカ・コーラ環境教育賞受賞	富山県	長井 忍氏	自然保護活動など
トミヨなどが生息する豊かな環境に恵まれた中で、ゲンジボタルや庄川水系の川魚の飼育・観察を通した、水生生物の環境作りに取り組んでいる。平成15年には「鴨川復元プロジェクト」を立ち上げ、地域の人々と藻刈りを実行するなど、住民、行政、有識者等と一緒に活動として深まりを見せている。				
佐渡市立内海府小学校・ 同市立内海府中学校	第13回コカ・コーラ環境教育賞受賞	新潟県	大矢 宏氏	生物飼育・ 保護活動など
佐渡のトビシマカンゾウの群生地として有名な佐渡の景勝地、大野亀で、毎年4月に地域の住民とカンゾウの増殖を実施している。また、7月には、ニツ亀海水浴場で全校児童による海浜清掃活動にも取り組んでいる。「内海府小・中連絡協議会」を設置するなど、小学校と中学校の職員が連携し、環境教育を実施している。				
氷見市立十二町小学校	第13回コカ・コーラ環境教育賞受賞	富山県	山本 道代氏	生物飼育・ 保護活動など
校区にある2つの国指定天然記念物「十二町潟オニバス発祥地」と「イタセンバラ」を中心に、十二町潟の自然を、植物(オニバス)、水生生物(イタセンバラほか)、鳥類(白鳥)に分けて4～6年生がプロジェクトチームを組み、長年にわたり保護活動に取り組んでいる。これらの活動を地域で発表するほか、オニバスの栽培を小学生が高校生に伝えるなど、質の高い活動を展開。これまでに数多くの賞を受賞している。				
夢花咲とんぼ隊	第13回コカ・コーラ環境教育賞受賞	静岡県	岡本 正彦氏	生物飼育・ 保護活動など
向笠地区にあるトンボの楽園「桶ヶ谷沼」にいる絶滅危惧種のベッコウトンボを守るため、広大な学校ビオトープを整備。トンボの生態観察などを通して、トンボが生息できる環境作りに取り組んでいる。平成17年には向笠小学校のトンボ好きが集まり「夢花咲とんぼ隊」を結成し、エコクラブに登録。また、磐田市内の学校に呼びかけ、アキアカネの移動に関する調査を3年間続けている。				

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
愛知県豊田市西広瀬小学校児童会	第1回コカ・コーラ環境教育賞受賞	愛知県	杉浦 真幸氏	自然観察、 美化活動など
児童の発案で始まった矢作川の透明度調査を始め、親子一緒に川掃除、東海自然歩道の整備、ゲンジボタルの飼育など20年以上活動を続けており、その様子は市の広報課のホームページにも掲載されている。6年生は酸性雨の問題に取り組みはじめ、子どもたちが将来環境を大切に考える事を目標に継続的な活動が行われている。				
サンクチュアリ ジュニアレンジャー	第3回コカ・コーラ環境教育賞受賞	静岡県	馬塚 丈司氏	生物飼育・ 保護活動など
野鳥、ギフチョウ、ムササビ、ホタル、アカウミガメやコアシサシなど野生生物の保護・調査、自然観察会などを実施。単位制を導入したジュニアレンジャー養成制度を活かし、身近な自然と野生生物の保護活動の重要性を訴えるとともに、自然の中に身をおいて「感動する心」の育成を目指している。				
青木村オオムラサキを守る会	第5回コカ・コーラ環境教育賞受賞	長野県	上原 旺氏	自然保護活動、生物飼 育・保護活動など
希少種国蝶オオムラサキの保護・育成を通じて、自然環境の保護・保全意識の啓発、及び青少年の健全・育成を図っている。コンサートや地元小学生が作詞・作曲した「オオムラサキの歌」の合唱、啓発カレンダーやバッヂの保育園、小・中学校への配布などを行い、活動の輪を広げている。				
めだかの学校	第5回コカ・コーラ環境教育賞受賞	山梨県	勝俣 源一氏	生物飼育・ 保護活動など
開発事業によって減少したメダカやドジョウ、トンボ、カエルなどを、休耕田を利用して保護・育成し、人と自然の共存を図る環境教育を実践している。地域社会に根づいた活動は、PTAや子どもたちが知恵を出し合って計画。県や市のイベントにも協力し、ネットワークづくりを目指している。				
江草にこここ・こどもエコクラブ	第6回コカ・コーラ環境教育賞受賞	山梨県	田崎 哲夫氏	自然保護、 リサイクル活動など
地域のゴミの散乱状況調査、水質調査、リサイクル推進活動の他、家庭訪問で環境問題についてのインタビューを実施し、活動結果を冊子にまとめ江草地区全戸に配布。発表会やインターネットを通じての啓発活動も積極的に行っている。				
神戸町ハリヨを守る会	第6回コカ・コーラ環境教育賞受賞	岐阜県	児玉 一郎氏	生物飼育・ 保護活動など
絶滅の危機に瀕している魚「ハリヨ(ハリウオ)」を守ろうと地域で会を設立し、学習講座、保護飼育、生息地周辺のクリーン活動を展開。地域内の小学校に「ハリヨ」の池を造成、児童が保護飼育を行うほか、「ハリウオのように生き生きなかよくがんばる子」をめざし、ハリウオ運動を推進している。				
中道南地区エコニンジャクラブ	第7回コカ・コーラ環境教育賞受賞	山梨県	中込 政美氏	自然観察、農業体験、 環境調査活動など
子供がやりたいこと、大人が伝えたいことを一緒に楽しく行うことを目的に、「目に見えないものを見るようにする」というテーマで空気、水質調査、「食を考える」というテーマで田植え、天然酵母のパン作り、「自然保護への行動力をつける」というテーマで蛍の学習と観察会、星の観察会等体験型環境学習プログラムを実践している。				
南帷子小学校わんぱく山活動	第7回コカ・コーラ環境教育賞受賞	岐阜県	高井 徹郎氏	自然保護、生物飼育・ 保護活動など
小学校周囲の山を「わんぱく山」と名付け子どもたちの遊び場として使用していたが斜面の荒れが目立ってきたため、児童会の「わんぱく山委員会」が中心となり、全校児童による土壌積、どんぐり苗木植樹、巣箱設置など環境保全活動を行っている。また活動を通じて様々な環境問題に目を向け、学習成果を「わんぱく山学習発表会」で発表している。				



中部



近畿・中国・四国

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
かがわ自然観察会	第2回コカ・コーラ環境教育賞受賞	香川県	村上 英二氏	自然観察など
大人から子どもまで50～100人程度を一般募集し、香川県内各所の山、里山、河川、干潟等で自然観察会を実施している。体験型の活動を継続的に行之、未来を担う子どもたちの環境に対する意識を高揚させることを目標としている。行政の依頼による観察会を開いたり、指導員研修会に講師を派遣するなど、地域に密着した活動も精力的に展開。				
摂津市自然観察会	第3回コカ・コーラ環境教育賞受賞	大阪府	村田 國翁氏	自然観察など
たんぽぽをはじめとする草花や川魚、野鳥などの観察を通じて、人と自然との調和・共生、さらには心身の育成を目指している。「環境ウォーク」や「環境ポスター」への応募参加、「水辺ウォッチング」などを行政や他団体と協働して幅広く行っており、環境問題に取り組んでいる人たちとのネットワークづくりにも注力している。				
21世紀えひめ ニューフロンティアグループ	第3回コカ・コーラ環境教育賞受賞	愛媛県	若松 進一氏	自然観察、生活・農業体験活動など
いまの子どもたちに不足しているといわれる、自然接触体験や親子共有体験、異年齢集団体験などの機会を提供する事を主眼に置き、無人島での原始生活体験、酪農・農業体験など多彩な体験型活動を行っている。「自然と友達」、「青少年に夢と感動を」のテーマのもと、21世紀を生き抜く青少年の育成に努めている。				
大阪府少年少女文化財教室	第4回コカ・コーラ環境教育賞受賞	大阪府	辻尾 榮市氏	自然観察、生活体験活動など
自然・社会環境の一部として生き続ける「ため池」を中心に、文化財や遺跡、歴史的伝統等を教材とする環境教育活動を20年以上行っている。毎年開催する「古代人アドベンチャー・チャレンジキャンプ」では、古代人の生活様式を通じて大自然と触れ合う遊びや子ども同士の連携意識、自然環境を尊重する意識を啓蒙している。				
京都自然教室	第5回コカ・コーラ環境教育賞受賞	京都府	八木 雅之氏	自然観察活動など
魚、昆虫など身近なものをテーマに、自然の素顔、生物の生態を観察。大自然への畏敬、地球環境問題、自然・環境・人間の共生を理解する心を育てている。自然観察指導員の有志4名でスタートし、口コミで広がった会員は現在約200名。				
地球派塾 共盛	第5回コカ・コーラ環境教育賞受賞	広島県	藤正 訓三氏	生活・農業体験活動など
都市部の親子を対象に、地域の特長を活かした農業体験や自然体験を通じて環境教育を実践。環境をテーマにユニークな自然学校の運営を目指している。木の葉を使ったカルタとりゲームや原始の火起こしなど、活動に工夫が見られる。塾生と地域住民の交流によって、地域の活性化にも貢献している。				
立田小学校ホタルボランティア	第6回コカ・コーラ環境教育賞受賞	三重県	杉本 佳隆氏 (児童会長)	生物飼育・保護活動など
「ホタルの里」づくりを目指し、5・6年生全員がホタルボランティアとなり、人工飼育・観察、ホタル飛翔時の見学者へのガイド活動を行っている。ホタルを学習に活かし、各学年で学習活動の成果を「ホタルの会」と名付けた学習発表会で地域住民に発表するなど、活動の輪を広げている。				
楠目小学校こどもエコクラブ	第6回コカ・コーラ環境教育賞受賞	高知県	久 恵子氏 (校長)	環境調査活動など
「生き生きと活動し、自ら環境に働きかけていくこども」を研究テーマとして、全教育活動で環境教育を進めている。同クラブは、その研究課程で発足。15クラブ185名が参加し、各クラブ毎に酸性雨やCO2の調査、水質調査など独自のテーマを追求する活動を行っている。				

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
愛知県立碧南工業高等学校	第14回コカ・コーラ環境教育賞受賞	愛知県	藤井 和義氏	自然保護、生物飼育・保護活動など
生活環境項目の環境基準を長年達成できていない、学校近くの湖沼「油ヶ淵」の水質改善のため、太陽光発電による水質浄化システムを設置。この水を校庭に引き込みビオトープを完成させ、蛍の幼虫を放流。生徒による地域住民に向けた環境保全に関する講演会も積極的に実施している。				
中津川市立加子母中学校	第15回コカ・コーラ環境教育賞受賞	岐阜県	福田 正晴氏	林業体験活動など
学校に隣接する民有林を「学びの森」として借り受け、地域の人を講師として招き、下草刈り、間伐や植栽等の林業体験、炭焼き体験、森林散策を実施。また間伐材を有効利用した「炭ポット」作りや、炭ポットを利用した「苔玉」作りを行い、地域に配布している。また、個人のテーマに基づき、学びのまとめを報告会で発表している。				
あま広域環境学習グループ エコきっず調査隊	第16回コカ・コーラ環境教育賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	愛知県	近藤 博氏	水環境や水文化伝承をテーマに、行政が広域連携した環境学習講座
古くから水運で栄えた地域の特性を生かし、毎年公募による児童たちが地域の川、河川の水しらべや田んぼ、川、干潟などの生き物調査等の体験活動から得た気づきと地域環境保全への思いを子供たちが発信し、地域の水文化を地域の人たちの支援を得て子供へ伝承する活動。				
岐阜市立三輪中学校	第16回コカ・コーラ環境教育賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	岐阜県	桑原 常晴氏	間伐等の森林保全活動/ 木質資源の循環について 体験的学習
地元の森林整備活動から派生する薪資源の活用や地域貢献、地域防災訓練など、さまざまな活動への広がりを生徒自身に体験させる取り組み。伐採木を薪としてエネルギー活用を実践、スギ・ヒノキ人口林の間伐、伐採木を活用したキノコ作りで食育活動の推進。				
長野県木曾青峰高等学校 森林環境課 農業クラブ	第16回コカ・コーラ環境教育賞 「次世代支援部門」優秀賞受賞	長野県	梶本 杏子氏	地域の森林と環境に関する課題の取り組み
中部電力・日義発電所の発電時に集まる落ち葉のストックに注目し、「落ち葉の有効利用」を研究してきた。腐葉土の用途開発に取り組み、地域の皆さんと共に「美しい街づくり」「安全な農業」「地元児童の自然観察と環境教育」など地域興しを行なう。				
愛知学院大学 起業研究会	第16回コカ・コーラ環境教育賞 「次世代支援部門」優秀賞受賞	愛知県	岩田 知之氏	土地再生プロジェクト
不健康な土を回収して健康な土にして返す仕組みを開発。小中学校における生徒とその家など、この活動を通じて地域に貢献できるものとする。地域規模で土から変えていくことにより、環境に優しい地域作りが出来ると考える。				
岐阜県加茂郡東白川村立 東白川中学校	第17回コカ・コーラ環境教育賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	岐阜県	林 真司氏	山林保全活動を通じて 環境教育を実施
長年に渡り教育課程に村内の山林保全活動を位置付け環境教育に取り組んでいる。①林業体験として、植林作業として1人約30本の苗木を植樹している。また、9月下旬に約1日がかかりで枝打ち作業を行っている。②源流調査として村を流れる白川の源流の体験活動を行い、川の水質検査と共に伊勢湾において源流からの水質調査を行っている。③これらの活動を「ふるさと学習会」として保護者・地域住民に対し発表を行っている。長年環境活動を続けており、村にも活動実績を高く評価されており、生徒の環境への意識も高く積極的に環境活動に参加している。				
富山県立中央農業高等学校 農業特別専攻科 「農と食と環境を結ぶ環境創造型農法開発チーム」	第17回コカ・コーラ環境教育賞 「次世代支援部門」優秀賞受賞	富山県	齋藤 大吾氏	食と農と環境を結ぶ環境 創造型農法の開発と普及
農作物の生産において ①除草剤・化学肥料を使用しない米ぬか農法に使用する米ぬかの散布機械を開発する。②ヘアリーベッチ農法の開発 ③地域住民や子ども達と共同の環境調査 ④本校から排出される米ぬかからバイオディーゼル燃料を精製加工 ⑤生産した無農薬米をフランスへ輸出 ⑥除草剤を使用せずにする水田除草器具を開発しベトナムで実験し、その汎用化を目指す。				
氷見市立十二町小学校	第18回コカ・コーラ環境教育賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	富山県	竹越 順子氏	オニバスの栽培研究、 絶滅危惧種イタセンバラの 飼育研究、白鳥の観察
オニバスの栽培研究、絶滅危惧種イタセンバラの飼育研究、白鳥の観察を長年継続して実施。2009年に、国内初となる学校でのイタセンバラの人工孵化に成功した。動植物の研究を大学や行政、有識者の指導を受け、家庭や地域と連携・協力して活動している。学習発表会やホームページで研究成果を情報発信している。				
刈谷市立小垣江小学校	第18回コカ・コーラ環境教育賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	愛知県	岩城 ひろみ氏	ホタルの幼虫の飼育や 川の清掃など、 ホタルの保護活動
「ホタルがいっぱい飛ぶ小垣江にしたい」という願いのもと、幼虫の飼育活動をはじめ、校内のホタル池作り、地域を流れる川や湧水池の水質検査、清掃、外敵駆除など、子供たちが考えた方法でユニークな活動を行っている。また、介護老人施設へのホタル幼虫プレゼントやホタル新聞の発行など地域へ情報発信し、昨年度、これらのレポートは環境省に提出。				
石川県立津幡高等学校 朱鷺サポート隊	第18回コカ・コーラ環境教育賞 「次世代支援部門」優秀賞受賞	石川県	南出 悠夏氏	トキと共に暮らせる 里山の再生、 交流(啓発)活動
トキと共生する里山の再生、啓発活動。食・農・環境を関連づけた学習を行うとともにトキへの関心を高める啓発を実施。イネやマコモ(多年草)を無農薬で栽培、トキや野鳥の餌場を作る。また町内小中学校など25ヵ所にバケツマコモを配布し、環境学習に使用してもらう。				

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
高知子ども森林インストラクター養成講座運営委員会	第12回コカ・コーラ環境教育賞受賞	高知県	吉村 裕司氏	環境学習活動など
森林に興味を持つ小学生に対して、木や森に関する1年間の講座を実施。年間12回の講座のうち10回以上受講した子どもを「高知子ども森林インストラクター」とし認定し、翌年以降の講座運営の補助に携わらせている。				
山口県周南市立八代小学校	第12回コカ・コーラ環境教育賞受賞	山口県	戸嶋 秀樹氏	生物飼育・保護、環境調査など
本州唯一の越冬地であるという環境を活かして、特別天然記念物「ナベツル」や絶滅危惧種「ギフチョウ」の生態観察および保護活動を実施。具体的には、ツルの住みよい環境づくりを目的としたクリーン活動や、3年生を中心としたギフチョウの飼育・放流などを行い、学年末には1年間の野生観察やツルの保護活動をまとめた愛鳥文集「やまびこ」を発行している。				
高安みどりの少年団	第13回コカ・コーラ環境教育賞受賞	大阪府	加納 義彦氏	生物飼育・保護活動など
絶滅が危惧されているニッポンバラタナゴ(淡水魚)や、その周辺に生息するホタルなどを保護するために、高安の里の環境保全活動を行っている。ため池の生物調査やホタル観察のほか、2001年からは高安地域の水環境を保全するため、下草刈りや間伐など森林整備活動も開始。ニッポンバラタナゴの保護池やゲンジホタルが生息する小川を含む里山の自然再生を目指している。				
NPO法人蒲生野考現倶楽部	第14回コカ・コーラ環境教育賞受賞	滋賀県	森田 英二氏	環境調査、自然体験活動など
「たんけん・はっけん・ほっとけん」を活動スローガンとして、環境文化を生かした活動を展開。「環境マネジメント局」による日野川や琵琶湖の調査研究、「文化プロデュース局」による堂コンサートなどの啓発活動、「しゃくなげ学校」での里山体験活動など、7部局で組織的な青少年育成活動を行っている。活動範囲は県内にとどまらず、韓国の子供とも交流。				
京都府立桂高等学校 草花クラブ	第14回コカ・コーラ環境教育賞受賞	京都府	關本 卓男氏	環境調査活動など
平成18年に節水率93%の節水育苗容器(KNC)を開発。少量の水で水稻苗・麦苗を栽培することに成功した。本年度は昨年の成果を踏まえ、地球温暖化の防止をはじめ、ヒートアイランド現象の抑制や都市環境の改善を図るため、節水育苗容器を活用した屋上緑化の研究に企業と連携しながら取り組んでいる。				
土佐清水市立下ノ加江中学校	第14回コカ・コーラ環境教育賞受賞	高知県	宮下 哲男氏	生物飼育・保護活動など
アカウミガメの卵を採取して、「カメハウス」にて孵化させ子ガメまで成長させて放流している。あわせて産卵場所の下ノ加江海岸等を清掃している。昨年は全国的に親ガメの上陸数が少なかったが、364匹の採卵で284匹が孵化し、孵化率は78%に達した。				
大阪府立八尾高等学校	第15回コカ・コーラ環境教育賞受賞	大阪府	老田 準司氏	自然保護、環境調査活動など
平成11年に設定された環境教育基本構想に基づき、校内緑化、ビオトープ作り、風力・太陽光発電装置の設置、20kW ソーラー発電システムの整備、雨水や井戸水の利用推進など、等身大の生きた教材として、校内環境施設の整備を実施。これらの施設を生かして、生徒による二酸化炭素の削減量、発電状況の確認や、周辺小中学校と共にビオトープでの淡水魚の飼育などを行う。その他、福祉マップを作成、文化祭における生徒デザインのエコバック販売、模擬店でのお皿・コップ再利用などに取り組む。				
愛媛県立松山工業高等学校	第15回コカ・コーラ環境教育賞受賞	愛媛県	松木 統生氏	リサイクル活動など
小学生に環境問題への関心を持ってもらうことを目的に、電子機械科の生徒が県内小学校で出前授業を実施。電動車いすを改造して製作したソーラーカーの試運転、自作の電動歯ブラシを試してもらうなど子どもの興味を引きやすい体験学習を展開する。そのほか、市内飲食店から使用済み割り箸を回収し、木質ペレットに変換して県内小学校へ冬季暖房燃料として配布したり、地元銀行とともにエネルギー銀行の創設を研究するなどの地域と協力した活動も展開する。				
彦名地区テビツ子環境パトロール隊	第16回コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」優秀賞受賞	鳥取県	向井 哲朗氏	環境に関する広報誌・環境新聞の発行/中海の水質調査/再資源化運動
環境保全を基軸にした活動を通して住民のため、地域のため、地球環境のために持続的な範囲で出来ることに取り組んでいる。町内の道路や小川、中海の海岸、側溝などの水質調査、様々な実験やエコクッキング等を通じて環境学習の感想なども環境新聞に掲載し地域に発信している。				
東近江市立能登川南小学校	第17回コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」優秀賞受賞	滋賀県	横井 元昌氏	地域の自然環境を守るため里山を舞台に自然観察や水環境学習を実施
学校内の環境教育という枠を超えて、地域の拠点となり活動している。毎年子供の提案を基に活動内容を決定している。これまで、里山学習・山路川の水質調査・伊庭内湖の調査・猪子山森林再生・節水活動・リサイクル活動・エネルギー学習等を行ってきた。また地域の協力・支援を得られるようになり、活動が充実している。子供達は環境へ積極的働きかけを行うようになっている。				

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
米子水鳥公園友の会	第6回コカ・コーラ環境教育賞受賞	鳥取県	遠藤 保人氏	自然観察、生物飼育・保護活動など
米子水鳥公園建設運動を行ってきた市民有志が、公園建設後も、野鳥観察会、「絵と作文コンクール」、野鳥のための環境整備、子供自然観察会等を通じて、公園の事業をボランティアとして支援している。99年度より小学生を中心とした「子供野鳥連続講座」を実施。				
こどもエコクラブPeace	第7回コカ・コーラ環境教育賞受賞	奈良県	坂井 美穂子氏	自然観察、自然保護、環境調査活動など
自然観察、川のゴミ拾いや水質検査を実施するほか、環境問題を訴える版画を制作するなど多岐にわたる活動を行っている。また、毎年学習したことを創作劇にまとめ、環境問題をアピールしている。創作劇は、「地球の秘密」、「未来へ」、「青空をあなたのもとへ」など5作品。年間県内各地で4・5回公演している。				
善通寺こどもエコクラブ	第7回コカ・コーラ環境教育賞受賞	香川県	井上 修氏	環境調査活動など
町並みウォッチングのほか水生生物調査、河川環境調査、こども葉っぱ判定士事業、古代米づくり、星座観察、大気調査など体験型の活動は多岐にわたる。				
エコ・パートナー21	第8回コカ・コーラ環境教育賞受賞	奈良県	森 正氏	自然保護、ボランティア活動など
こども達へのボランティア活動や国際交流の場を提供するため、お年寄りとの交流ショッピング、チャリティー募金、外国人との交流会などを開催するほか、こどもによる「地球温暖化市民キャンペーン」活動や講演会、環境ミュージカル、絵本の作成を実施している。また、地球温暖化防止を目指して企業にケナフの利用推進を働きかけ、資源ゴミの回収を行政に働きかけ実現させている。				
大阪府立城山高等学校 園芸科草花専攻部	第8回コカ・コーラ環境教育賞受賞	大阪府	中村 和幸氏	自然観察、生物飼育・保護、美化活動など
「蝶のとぶまちづくり」を目指して、蝶の生態調査や食餌植物、吸蜜植物の繁殖活動、バタフライガーデンの設置・管理等を行っている。また校内活動にとどまらず、植物を地域住民に無料で配布し植栽の指導をするなど地域ぐるみの活動への拡大にも取り組んでいる。				
岩国市立杭名小学校	第9回コカ・コーラ環境教育賞受賞	山口県	国清 節子氏	環境調査、美化活動など
小学校にほど近い錦川を学習・体験の場とし、水生生物の観察や水質調査、清掃活動、啓発看板の設置等に取り組む。				
藤原町立藤原中学校 環境バピルス委員会	第10回コカ・コーラ環境教育賞受賞	三重県	三輪 敏氏	自然保護活動など
優れた水質浄化能力をもつことを立証以降、バピルスを環境のシンボルとして栽培。町内での無料配布、栽培に米のとぎ汁の利用を呼びかけるなど啓発にも取り組む。また、バピルス栽培をきっかけに環境への関心が高まり、「藤原中環境宣言」を策定したり、町行政に「藤原町学校版環境ISO」認証システム構築を要請するなど活動は高度化している。				
大津こども環境探偵団	第11回コカ・コーラ環境教育賞受賞	滋賀県	小林 志帆氏	自然観察活動など
小学生の部、中学生の部を設け、それぞれが楽しみながら自然環境や動植物の観察、水質調査などを実施し環境保全のリーダーを育成。探偵団を卒業したリーダーは社会人や大学生になっても地域の環境グループ長として活躍している。卒業生は設立以来、延べ900名を超えた。				
篠山市立今田小学校	第12回コカ・コーラ環境教育賞受賞	兵庫県	宮田 正彦氏	生物飼育・保護、リサイクル活動など
絶滅危惧となってしまった地域のシンボル草花"サギソウ"を栽培・調査し、公共機関で展示を行うほか、ハッチョウトンボ、ギフチョウなど、地域の希少な動植物の飼育・保護も実施。こういった活動を自然環境フォーラムで地域の方々に伝えている。活動費用は、アルミ缶のリサイクル換金によって賄っている。平均で年間1.5トンのアルミ缶を回収。				
長浜市水生生物少年少女調査隊「みずすまし」	第12回コカ・コーラ環境教育賞受賞	滋賀県	中川 衛二氏	環境調査調査活動など
長浜市内6小学校の4年生から6年生と教員で結成。川の調査を通して、子供たちが環境を素直に見つめる目を持つことを目指している。河川の水質調査のほかにも環境日記の作成、交流会、琵琶湖で湖上調査などを実施。				



九州・沖縄

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
矢部郷自然観察会	第4回コカ・コーラ環境教育賞受賞	熊本県	藤吉 勇治氏	自然観察活動など
四季折々の自然観察会や環境調査、キャンプなどを通じて、実際に自然と触れ合う機会を子どもたちに提供し、自然のことをよく知り、自然との共存を考えることに主眼を置いている。矢部郷の豊かな自然環境を次世代に繋げるためにジュニアレンジャーの育成を行い、小・中・高生を中心とする地域住民が活動に参加している。				
グラウンドワーク福岡	第5回コカ・コーラ環境教育賞受賞	福岡県	大谷 妙人氏	自然観察、生物飼育・保護活動など
ノーマライゼーション＆バリアフリー社会の実現を目指す、活動の一環としてサンショウウオの放流や自然観察会、ネイチャーゲームなどを行っている。イギリスのグラウンドワークトラスト団体との交流や研究・実践等を通じて、環境を含めた住み良いまちづくりを展開している。				
かごしま自然観察会	第5回コカ・コーラ環境教育賞受賞	鹿児島県	浜本 奈鼓氏	自然観察、自然保護活動など
野外観察会やネイチャーゲームを幼児から高齢者まで幅広い層を対象に実施しており、モットーは、「採らない」「殺さない」「持ち帰らない」。自然本来の姿を壊さないで自然に親しみ、自然を守るための啓蒙・教育活動を行っている。スタッフの自然観察指導員を他団体へ講師として派遣している。				
大津南ジュニアクラブ	第7回コカ・コーラ環境教育賞受賞	熊本県	上田 寛氏	自然観察、自然保護、生物飼育・保護活動など
熊本県教育委員会より環境教育の研究指定を受けたことをきっかけに「身近な環境に目を向け環境を大切にすることの育成～白川を中心とした総合的な学習を指向して～」をテーマとして全教育活動で環境教育活動を推進。全校児童を対象に「大津南ジュニアクラブ」を結成し、ビोटープづくりやメダカ・ホタルの保護活動等を行っている。				
こども環境ネットワーク "もしもし地球"	第8回コカ・コーラ環境教育賞受賞	福岡県	吉田 順子氏	環境調査活動など
次世代の環境保全活動指導者の養成を目指して、河川調査などの自然体験の場を提供し、「こども環境サミット」の開催や学校における総合学習への「出前授業」など多彩な環境啓発活動に取り組んでいる。8年前に創刊された「もしもし地球」は2001年1月に21号が発刊されている。				
平岩こども教室	第8回コカ・コーラ環境教育賞受賞	宮崎県	窪田 昌二氏	生物飼育・保護活動など
アカウミガメの保護活動を中心に、お倉ヶ浜の動植物の調査・保護活動や自然保護に関する童話創作活動に取り組んでいる。				
福岡市立三筑小学校	第10回コカ・コーラ環境教育賞受賞	福岡県	竹内 義子氏	環境調査、美化活動など
地域の公民館や小学校と連携して、清掃や花いっぱい運動などの美化活動、川・干潟・海の水質調査などに取り組む。また、恵まれた情報通信環境を生かし、他地域の社会教育施設とのネットワーク授業を行うなど、校外の専門家を積極的に活用した取り組みを実践している。				
特定非営利活動法人エコシステム	第10回コカ・コーラ環境教育賞受賞	熊本県	向井 栄子氏	自然体験、生物飼育・保護活動など
生態系保護をめざして、ナショナルトラスト運動を展開。その買い上げた土地に日本初のビोटープ体験学習場「エコ学習公園」を造成。しいたけ栽培やカブトムシの保護など子供達の自然体験の場として活用されている。また、野鳥保護を目的として、密漁の監視、放鳥運動にも取り組む（環境省へ陳情）。				

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
三豊市立下高瀬小学校	第17回コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」優秀賞受賞	香川県	藤田 数繁氏	省エネ学習を中心に環境・エネルギー教育を実施
「ものや人に感謝し、大切にすることの育成」をテーマに活動している。①省エネ項目を掲示するなどの「下小もったいない憲法」②節電を呼び掛ける「省エネ委員会」③節電・節水・リサイクル・食・緑の各テーマごとに無駄遣いを減らす「もったいないおばけバスターズ」④地産地消の米作り⑤間伐体験⑥アルミ缶リサイクル・屋上緑化・太陽光発電学習機の設置⑦文化祭の劇やエコ祭りなどによる環境保全の呼びかけを行っている。地域の専門機関や大学生との連携・交流も図っている。県の環境学習実践モデル校やエネルギー教育実践トライアル校の指定を受けており、多角的な活動を行っている。				
京都市立蜂ヶ岡中学校	第18回コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」優秀賞受賞	京都府	藤本 啓次氏	多岐に渡る環境活動
植栽活動を中心に地域を巻き込んだ環境活動を実施。2005年から環境教育の取り組みを充実させ、植栽活動・節水・節電・雨水タンク・伐採木の再利用・エコキャップ・空き缶回収・緑のカーテン・環境カルタ・廃油せっけんなど、多岐に渡る環境活動を展開。				
京都府立桂高等学校 バイオテクノロジー部	第18回コカ・コーラ環境教育賞「次世代支援部門」優秀賞受賞	京都府	村上 信夫氏	コケ植物によるヒートアイランド現象の緩和と普及活動
コケ植物によるヒートアイランド現象の緩和と普及活動。コケ植物の持つ、軽量、管理の容易さ、乾燥にきわめて強い性質を活用し、壁面緑化からヒートアイランド現象の緩和を図る。そして、この研究の成果を小学生や中学生さらに一般の方々にも紹介し、普及に努める。				
兵庫県立播磨農業高等学校 サイエンス部	第18回コカ・コーラ環境教育賞「次世代支援部門」優秀賞受賞	兵庫県	猪股 雅美氏	地域の小学校と連携し、絶滅危惧種の保護活動
地元小学校と連携し、絶滅危惧種の水生植物、ミズトラノオの保護活動を展開。加西市に自生するミズトラノオは環境省のレッドリストに指定されており、同市は関西で確認できる唯一の自生地。校内では株の増殖を実践し、昨年度からの小学校との連携教育を今年度も実施。				

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
喜瀬武原小中学校	第16回コカ・コーラ環境教育賞受賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	沖縄県	渡慶次 淳氏	地域の環境観測活動 や環境教育活動
環境観測活動を活用した「総合的な学習の時間」では「自然環境班」「ボランティア班」「情報交流班」に分かれ活動。ダンボールコンポストを作成し、各家庭や地域の児童園に寄贈し、普及活動を実施。また地域河川の水質調査を通して「川の未来構想計画」を作成し、役場へ提言。地域への啓蒙活動に取り組む。				
西表ヤマネコクラブ	第16回コカ・コーラ環境教育賞受賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	沖縄県	池村 久美氏	西表島とテーマにした 環境活動
西表のことをもっと知りたい、調べたい、きれいにしたい」をテーマに、西表島西部地区を中心に自然観察、水調査、ゴミ拾い&分別、ものづくりキャンプ、エコライフの実践等を環境問題を意識しながら行っている。特に、イリオモテホテルの観察は11年間継続している。また、活動を新聞等にまとめ、地域の人へ環境問題をアピールしている。				
沖縄県立宮古総合実業高等学校 環境班	第17回コカ・コーラ環境教育賞受賞 「次世代支援部門」大賞受賞	沖縄県	奥平 光氏	地下水の保全のために 水質調査・有機肥料の 製造と活用をする
宮古島の地下水の汚染物質である硝酸態窒素の濃度を測定し現状を把握・監視する。原因である化学肥料の利用を減らすために、有機肥料を開発し島の農業に普及させる。また、これまで栽培歴のなかった日本そばの栽培に挑戦する。				
延岡市立三川内中学校	第17回コカ・コーラ環境教育賞受賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	宮崎県	岡山 清人氏	地域の自然を愛し環境を 大切にする生徒の育成を 目標として環境教育を実施
①校内緑化活動の推進(学級花壇・花の苗移植・育成・緑のカーテン等) ②リサイクル活動(空き瓶・空き缶のリサイクル・牛乳パックではがきづくり ③三川内河川大清掃 ④ホテル調査 ⑤水生生物調査 ⑥環境問題についての学習・発表等を内容とする全校の活動である。さらに、地球温暖化教室では家族ぐるみで実践を行う。さらに今年度からエコクラブに生徒全員で参加し、意識の高揚につながっている。				
久米島ホテルの会	第17回コカ・コーラ環境教育賞受賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	沖縄県	宇江原 総清氏	久米島のみに生息する「クメ ジマホテル」をシンボルとして 自然環境の保護・保全を行う
「カンジダム湖」の水質改善のために、近隣の小学校・土地改良区の農家・町役場と協力し、湿地棚田とホテル水路を整備した。また、水辺の生き物の植栽・放流も行っている。活動の結果、ダム湖のアオモガが消滅し多数の水鳥が飛来し、さらにホテルの数が増加している。さらに、「こどもレンジャー」として、子供たちが主体となって、森づくり・ゴミ拾い・冒険塾・外来種駆除・ホテル調査などの保護活動を行う。また、絵人形の製作・公園やサンゴマップの製作・琉球新報ジュニア通信員などの情報発信をしている。これらの成果を毎年環境省にレポート提出し、沖縄大学ジュニア研究支援で研究発表を行っている。				
熊本県立八代農業高等学校泉分校	第17回コカ・コーラ環境教育賞受賞 「次世代支援部門」優秀賞受賞	熊本県	安尾 博徳氏	「巻枯らし間伐」を行い、 豊かな森を取り戻す
樹皮を剥ぎとって立ち枯らす方法「巻枯らし間伐」で森林を保護する。同方法は、樹皮を剥ぎとって立ち枯らす方法である。残った木の倒壊を防ぐ効果もあり不健康な森の整備に適している。さらに、同方法は子どもや高齢者でも安全に行えるというメリットがある。既に地元の森において小中学生と協働して間伐を行っている。地元泉町に間伐予定の森林を紹介してもらい、作業を行う計画である。また熊本学園大学やmore treesとの協働も予定。				
佐賀県立唐津南高等学校 農業クラブ 松露プロジェクトチーム	第17回コカ・コーラ環境教育賞受賞 「次世代支援部門」優秀賞受賞	佐賀県	穴澤 孝介氏	森の松葉掻きを行い キノコ「松露」を復活させる
「松南の森」の松葉掻き・除草・苔取り・広葉樹の伐採を地域とも協力して行う。クロマツの単層林を実現し、最終的に「幻のキノコ」と呼ばれる「松露」が生育する森にする。				
浦添市立港川小学校	第18回コカ・コーラ環境教育賞受賞 「活動表彰部門」大賞受賞	沖縄県	崎濱 秀一氏	地域の海の生態系を学習し、 自然環境の保護・ 保全活動などを行う
地域の海の生態系の学習、自然環境の保護・保全活動などに取り組む。地域の自然に触れて学んだ環境保全の必要性を、児童が保護者や地域の人々向けの発表会などを通して発信。専門家との連携を図りながら、環境教育を継続的に実施している。				
北九州市立曽根東小学校	第18回コカ・コーラ環境教育賞受賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	福岡県	柴田 敏行氏	干潟の清掃・体験学習、 省資源・省エネ活動
干潟の清掃・体験学習を、1993年から地域を巻き込んで継続的に実施。児童の発案で始まった「曽根干潟クリーン作戦」は、保護者・漁協・自治会・保育園・行政・企業など、総勢600名を超える地域の一大イベントとして根付いている。また、子供にも実践可能なCO ₂ 削減方法を考えるなどの活動にも取り組む。				
熊本市立清水小学校	第18回コカ・コーラ環境教育賞受賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	熊本県	富永 和俊氏	自然と触れ合いながら、 エコ学習やエコ活動に 取り組む
「緑を愛し育て守る清水っ子」を目標に活動を展開。地域と協力し、自然とふれ合う活動(緑化活動、樹木札作りなど)やエコ活動(堆肥化マシン、雨水くんなど)、エコ学習に取り組み、循環型の社会を目指した活動を行っている。				

団体名	受賞回数	活動地域	代表者名	主な活動内容
福岡県立北九州高等学校 魚部	第11回コカ・コーラ環境教育賞受賞	福岡県	城戸 晴紀氏 井上 大輔氏	生物飼育・保護、 環境調査活動など
高校の部活動として、水生生物の調査などのフィールド活動や、学校ビオトープでの絶滅危惧種の保護・繁殖、市立水環境館での展示の企画・採集・説明などを行うほか、小学校でのゲストティーチャーとして一緒に川に出る活動を行っている。また、調査活動の記録として図鑑を製作・出版、ホームページを公開している。				
福岡市立早良小学校	第11回コカ・コーラ環境教育賞受賞	福岡県	小川 等氏	生物飼育・保護、 農業体験活動など
総合的な学習の時間に学年ごとにテーマを設定し、地域の良さを感じ取れるような学習を実施。その中で、地域の小中学校とのネットワークを生かしながらホテルの飼育放流活動、餌となるカワニナの飼育を行い「ホテルの里早良づくり」を推進や、大豆栽培や稲作など様々な体験学習なども実施している。				
サンゴとブロッコリの森自然学校	第12回コカ・コーラ環境教育賞受賞	沖縄県	中根 忍氏	自然体験活動など
エコツアーを実施する中で環境教育の重要性に気づき、子どもたちへの自然体験学習や、教育関係者に対する指導者養成の推進のために設立。ヤンバルクイナなどの希少生物の保護活動や、全国フォーラム、親子での自然体験キャンプなどを開催。				
佐賀県立唐津北高等学校	第13回コカ・コーラ環境教育賞受賞	佐賀県	藤巻 良治氏	美化活動など
開校当時から行っている清掃活動に加え、「総合的な学習の時間」および、独自に開講した科目「郷土の海洋学」を通して、地域の自然環境・社会環境を学んでいる。また「高校生の自然と環境サミット」を開催し、他の地域で環境活動に取り組む高校の生徒たちと21世紀の環境問題について語り合うなど、外部団体との積極的な交流を行っている。				
NPO法人屋久島エコ・フェスタ	第13回コカ・コーラ環境教育賞受賞	鹿児島県	古居 智子氏	環境調査活動など
屋久島の環境保護に向けた意識啓発と情報発信を目的に活動。定期学習会や年1回の環境文化イベントを実施。2001年4月から環境学習事業部門として「やくしまエコ・キッズ」を設立し、小中学生を対象にした野外活動、創作活動、環境調査活動を開始。2004年からはインターネットを使い、島の外へ情報を発信するなど、近年、特に小中学生を対象に積極的に活動している。				
沖縄県立辺土名高等学校 環境科	第13回コカ・コーラ環境教育賞受賞	沖縄県	金城 孝忠氏	自然体験活動など
豊かなやんばる(山原)の自然に囲まれた高校に、2001年から環境科を設立。以来、沖縄のみならず全国から生徒が入学。やんばるの豊かな自然をテーマにした野外学習を進めている。その他、地域クリーンアップ作戦や他の高校との合同研修、そして数多くの環境サミットでの発表など、幅広い活動を継続的にを行っている。				
黒木町立黒木小学校	第14回コカ・コーラ環境教育賞受賞	福岡県	太郎良 信一氏	美化活動、 環境学習活動など
藤の花の栽培、鑑賞、公共施設への配布等を通して、地域の人と関わりながら命・環境について学ぶ活動を行っている。総合的な学習の時間「藤っ子タイム」を中心に、特に藤の花の木製プランターを作り、地域に寄贈する活動を10年継続している。また、ボランティアグループ「スキップ」を立ち上げ、バス待合所への絵画、花の展示を行っている。				
うるま市立宮城中学校	第14回コカ・コーラ環境教育賞受賞	沖縄県	知念 峯子氏	環境調査、 美化活動活動など
平成9年に文部科学省の環境教育推進モデル校の指定を受け、その頃から豊かな自然環境を生かした環境教育に取り組む。平成11年からはGLOBE指定校として気象観察および水質観察を実施。また平成12年からはオカガニ観察会および海岸清掃も行う。その他、廃棄自動車不法投棄調査などを含め、これらの取り組みを現在まで継続して行っている。				
つのむれみどりの少年団	第15回コカ・コーラ環境教育賞受賞	大分県	藤野 哲郎氏	自然観察、 美化活動活動など
自然林に覆われ、野鳥の宝庫である、標高576mの角埋山(つのむれやま)の自然を守るために活動を続ける「つのむれ会」の子供たちの会として、地域の小学生や児童養護施設の子供を中心に結成。毎月1回の自然観察のほか、つのむれ山の緑を育てる活動やクリーン活動などを実施している。				
鹿児島県出水市立荘中学校 ツルクラブ	第16回コカ・コーラ環境教育賞受賞 「活動表彰部門」優秀賞受賞	鹿児島県	金久 三男氏	野生生物の保護活動 の普及啓蒙
出雲平野に飛来するツルの羽数調査は昭和35年から行っており、地元の人たちとともに生徒に受け継がれてきた活動です。生徒は校区内のツル観察センターで入館者に対しツルの生態等について解説を行い、野生生物の保護活動の普及啓蒙に努めている。				

公益財団法人コカ・コーラ教育・環境財団

小澤紀美子理事からのメッセージ

「今、なぜ環境教育が必要か」
環境教育の現状と必要性や、環境教育の歴史を振り返つての変化について、環境教育研究の第一線で活躍されている小澤紀美子理事に伺いました。



公益財団法人
コカ・コーラ教育・環境財団 理事
東海大学教養学部
人間環境学科 教授
小澤紀美子（こざわきみこ）

環境教育は「未来をつくる力」を育む！

21世紀に入り環境への関心が高まるとともに気候変動の影響による自然災害リスクの増加、グローバル化に伴う経済危機の連鎖などに不安感を募らせる人々が増え、このままでは未来が「持続不可能」なのではないという危機感から、「環境教育」は極めて重要な課題となつてきています。

かつて公害や自然保護を重視してきた環境教育は、今や、さまざまなセクターが連携・協働してかけがえのない人類共通の財産である地球環境を保全し、脱温暖化（低炭素型社会）や生物多様性にもとづく自然

との共生社会、資源循環型社会づくりを基底とした持続可能な社会の実現にむけて、責任を自覚し、未来へ向けた行動ができる「人づくり」が環境教育に求められています。

環境教育とは、単に環境問題について教えることではありません。「人と人、人と自然、人と地域、人と文化、人と地球との関係性の再構築にむけて、「過去に学び、今を知り、未来を創る」教育です。そこで、人と人、人と自然、人と地域、人と歴史・文化、人と環境との「かわり」「つながり」を探究し、それらを関係づけ、学習者と学習課題と

の対話的な相互プロセスを通して学び、「地域を育てる能力」を育成していくことです。

変化の激しい時代であるからこそ、「コカ・コーラ環境教育賞」受賞団体の多くの実践が示すとおり、地域の記憶を共有し、「場の意味」（センス・オブ・プレイス）を媒介として、子どもと大人が共に向き合う「学び合い」の場が地域に広がっていくのです。

環境教育では「未来への責任」と「未来のビジョン」を共有し、「未来へのシナリオ」を構築していく「学び」と「未来を創る能力」の育成の展開方法が重要になってきます。分野横断的な課題や社会的争点を柔軟な発想力と思考・洞察力、対話力で解決していくことのできるスキル育成のプロセスが重視される

ければなりません。社会のあり方や環境にかかわる問題解決には絶対正しい唯一の解があるわけではないので、一人ひとりが持続可能な社会の姿やそれに至る道筋を考え、議論していくプロセスそのものが環境教育といえます。さらに科学知（学校知）に伝統的にそれぞれの地域で培われてきた生活知（文化知）も統合して展開していく文理融合的な発想や思考力・洞察力も求められています。

こうした展開がさまざまなセクターや主体が連携・協働していく「市民知」と、「未来を創る能力」（コミュニケーション力、システムの思考力、批判的分析力、論理的思考力・意思決定能力、他者とともに働く力）の育成にいたるのです。



コカ・コーラ環境教育賞概要

コカ・コーラ環境教育賞は、環境ボランティア活動の助成・支援を通して、環境教育・環境保全活動を促進する事を目的に、1994年に創設されました。以来、18年にわたり、環境教育に関する活動が顕著である団体・個人を顕彰しています。

2009年より、小中学生を対象にした地域社会の環境教育に関する活動実績を顕彰する「活動表彰部門」と、高校生および大学生による環境保全・環境啓発に寄与する新しい企画を支援する「次世代支援部門」の2部門制へと発展しました。

主催：公益財団法人コカ・コーラ教育・環境財団
協力：読売新聞社
後援：文部科学省、環境省

活動表彰部門

趣旨：コカ・コーラ環境教育賞「活動表彰部門」は、環境教育・環境保全活動を促進する事を目的に、小中学生を対象にした地域社会の環境教育に関する活動が顕著な個人・団体を称え、表彰します。

選考基準：1・活動実績
これまで行なってきた具体的な活動内容
2・地域密着
地域社会との連携または地域社会への貢献
3・組織
指導者の教育方法及び小中学生の主体的な関わり
4・継続性
活動年数及び活動頻度
5・発展性
活動を通じた子供たちの成長及び今後の成長の期待
6・情報発信
外部への積極的な情報発信（活動の共有）
対象：小中学生及び指導者
内容：小中学生を対象にした地域社会の環境教育に関する活動実績
表彰：大賞50万円×1組 優秀賞10万円×9組
選考方法：一次選考会：当財団の選考委員による書類選考にて
最終選考会：ノミネート団体による最終選考
プレゼンテーションにて大賞及び優秀賞を決定

次世代支援部門

趣旨：コカ・コーラ環境教育賞「次世代支援部門」は、高校生および大学生による、環境保全・環境啓発に寄与する新しい企画を具現化することを目的とし、支援を行います。また、次世代支援部門は、将来的に社会の環境教育に役立つことを目指します。

選考基準：1・企画性
独自性があり、他の企画と比べて目新しさを感じさせるもの
2・実現性
スケジュールや予算など、企画を実現する可能性が高いもの
3・公益性
将来的に社会に貢献できる要素を含んでいるもの
4・主体性
応募者である高校生や大学生が主体となっている企画であるもの
5・汎用性
社会において幅広く活用性があるもの
対象：高校生・大学生
内容：高校生及び大学生による環境保全・環境啓発に寄与する新しい企画
表彰：大賞100万円×1組 優秀賞30万円×4組
選考方法：一次選考会：当財団の選考委員による書類選考にて
最終選考会：ノミネート団体による最終選考
プレゼンテーションにて大賞及び優秀賞を決定

寄稿

環境教育活動の意義〜コカ・コーラ環境教育賞 最終選考会を見て〜

環境教育のすすめ

2011年盛夏、北海道雨煙別のコカ・コーラ環境ハウスで開催された「第18回コカ・コーラ環境教育賞」最終選考会の模様を拝見しました。大変暑い日でしたが、それ以上に会場にあふれる子どもたちの熱気、そして、いずれの発表も地域の自然や特色を活かした創意工夫あふれるものであったことが、強く印象に残っています。近年、子どもたちが自然に触れる機会が減少していますが、自然の中で仲間と体験活動をしたり地域の自然を学んだりするきっかけさえあれ

文部科学省大臣官房審議官
(スポーツ・青少年局担当)
有松 育子

ば、子どもたちは教える側が想像する以上に熱意と関心を持って応えてくれるのではないかと、この思いを強くしました。新学習指導要領では、環境教育に関する内容が充実され、自然体験活動の推進等も盛り込まれています。先生方には、子どもたちが自然や環境について理解を深め、自ら学び体験するきっかけづくりをして頂くことを強く期待しています。文部科学省も、その取組を全力でサポートして参ります。

環境教育の目指すもの

環境問題を解決するためには、幼児期からの自然とのふれあい、そして環境教育が大事です。その環境教育の内容は、公害教育、自然保護教育から変遷し、平成23年6月に改正された環境教育推進法では、「持続可能な開発のための教育(ESD)」を踏まえ、環境の保全のみならず、「あらゆる場において、環境と社会、経済及び文化とのつながり、その他環境の保全についての理解を深めるために行われる環境の保全に関する教育・学習」と定義されました。

環境省 総合環境政策局環境経済課
環境教育推進室
増井 久輝

私は、第18回「コカ・コーラ環境教育賞」を受賞した学生の発表を拝見して、環境教育が学校内での教育という枠を超え、地域の多様な主体と連携して地域の課題を解決する活動に結びついていることを知り、深く感銘を受けました。

環境教育は、地域が直面する諸問題の解決に役立たせるべく、自ら考え行動できる人材、そして「未来を創る力」を学校で学んだことを一切忘れてしまった時にもなお残っているものを育成するものと期待しています。

編集後記

玉村 斉聖

東京大学工学部システム創成学科
環境エネルギーシステムコース4年



今まで「人間が生きていくために必要なエネルギーをどう確保するか」という人間中心のことを考えていた。それと対極にある考え方を学んだ今、いかに人間と自然の調和を取るかを考えていこうと思う。

坂下 貴幸

東海大学教養学部人間環境学科
自然環境課程3年



チーム全体で目標を達成することの難しさ、またその中にある面白さを学びました。「環境教育とは何か」、港川小学校でのインタビューにて投げかけられたその問いを、これからも考え続けていきたいと思っています。

瀬戸川 幸奈

慶應義塾大学文学部
人文社会科学科4年



指導者の方への取材を通して、郷土愛をはくむ環境教育のあたたかみを感じました。この冊子をきっかけに、より多くの指導者の方々が環境教育の想いを実践に移せるようになってくだされば幸いです。

原 裕太郎

東京大学文学部
言語文化学科4年



約半年間、学生リーダーとして事例集作成プログラムに参加させていただきました。環境教育のことを何一つ知らない中で、様々な発見や勉強をさせてもらい、素晴らしい仲間と一つの事例集を作ることができて最高の経験でした!!

山本 康裕

東京大学工学部
電気電子工学科3年



この活動では、実際の教育現場にも取材に行くことができ、環境教育の裾野の広さと、活動の深さというのを感じることができました。こうした環境教育の取り組みが、ますます広がってほしいと思います。

田口 真

早稲田大学先進理工学部
応用化学科1年



今回の活動で扱ったどの団体も活動的で、私は刺激を受けてばかりでした。この活動を通してお世話になった方々への感謝の気持ちでいっぱいです。この事例集が少しでも多くの方の目に留まることを願っています。

富浦 祥子

慶應義塾大学理工学部
機械工学科3年



自分一人ではなかなか出会うことのできない環境教育に触れ、その可能性に刺激を受けました。取材中に会った指導者の方や子どもたちの言葉達は私の大きな財産となりました。この事例集を通して、その魅力が少しでも伝わればと思います。6か月間一緒に活動したサミットのメンバーには感謝!

松尾 郁実

東京学芸大学教育学部
環境総合科学課程環境教育専攻3年



編集にあたり、様々な人の想いを知りました。「環境教育」をどう捉えるかは、全てがその人次第です。この事例集が多くの人目に触れ、「環境教育」を考えるきっかけになれば良いと思います。

土屋 綺香

早稲田大学人間科学部
人間環境科学科2年



初めての外部団体での活動で至らない点がたくさんありましたが、他大学の学生と共にひとつのものを作り上げるという素晴らしい経験ができてよかったです。短い間でしたが、コカ・コーラ環境学生サミットに関わっていただいた皆様、メンバーの皆、ありがとうございました!取材、行きたかったなあ…。

加藤 美香

早稲田大学人間科学部
人間環境科学科1年



インタビューなどを通して環境教育をする指導者の方々からの熱意が伝わり、本当に素晴らしかったです。できあがった「環境教育のすゝめ」が、新たな環境教育をスタートするきっかけになってくれることを願っています。

新國 宏樹

東京学芸大学大学院教育学研究科
総合教育開発専攻修士課程1年



各地でのインタビュー取材を通して、指導者と地域が本音で子どもたちのために議論する姿が印象的であり、活発な環境教育を行うには地域とそこで生きるヒトの魅力を子どもたちに伝えることが重要だと感じました。

鈴木 睦未

東海大学教養学部人間環境学科
自然環境課程3年



事例集作成にあたり、多くの仲間と協力者の方々に恵まれました。特に青森で出会った方々の温かさが忘れられません。人と人、人と地球との繋がりをこれからも大事にしていきたいです。本当にありがとうございました!

おわりに

本事例集は、公益財団法人
コカ・コーラ教育・環境財
団の支援の下、環境教育・
環境保全活動を促進する事
を目的に、コカ・コーラ学生
環境サミットが中心となり作
成いたしました。



コカ・コーラ学生環境サミッ
トは、異なる興味・関心を
持った学生で構成されてお
り、本事例集作成には約半
年間を費やしました。

発足当初は手探り状態
だった我々も、個々の知識
や経験を共有すると共に、
コカ・コーラ環境フォーラム

2011において環境教育
の片鱗に触れることで、徐々
に考えを練り上げ、「心情面
に刺激を加えることで環境
教育の実施を促す」という、
他に類を見ない環境教育事
例集の作成をコンセプトとし
て掲げることになりました。



そのコンセプトを達成するた
め、我々は現在環境教育活
動を行っている方々に様々な
形でアプローチを取り、時
は実際に現場に足を運ぶこ
とで、そこで活動されている
方々の「生の声、生の感情」を
感じ取り、本事例集に反映

させるように努めました。
また、内容面に劣らずビジュ
アルや形式も重要視し、少し
でも気軽に手に取りやすい事
例集にしようと創意工夫を
凝らしました。



そして、本当に多くの方々の
お力添えによって本事例集は
何とか形になりました。
最後に、事例集作成にご協
力いただいた全ての皆様に、
深く感謝を申し上げます。

2011年11月29日

コカ・コーラ

学生環境サミット一同





冊子名 環境教育のすゝめコカ・コーラ環境教育賞事例集
 発行者 公益財団法人コカ・コーラ教育・環境財団
 編集者 コカ・コーラ学生環境サミット
 発行月 平成23年12月